

俳句雜誌

令和五年六月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十六卷第六号

水明

2023 6月号



《今月のかな女》

花苔に父母おはす墓となり

(句集『龍膽』)

長谷川かな女

苔の花といっても、実際には花ではなく、梅雨の時期に苔の緑が濃くなり、雌雄の生殖細胞の入った器托という白や淡い紫色の小さな傘状の胞子体を伸ばすので、これが花のように見える。かな女の父は、明治30年4月、心臓の病で36歳の若き命を閉じ、母は、昭和2年1月、肺炎で亡くなった。夫・福太郎の死後、30年余を寡婦で過ごした母を、いま父が温かく迎えたことだろうと思っているかな女。苔の花が、少し淋しさを誘う。

(鬼之介・註)

水 明

第1113号

— 華の一句 —

春の夜や恋文を書くペンの音

反 町 修

パソコンやスマホなど、万能の機器
が人を支配している現今に鑑みて、
遠ざかって行く昭和を手許に引き寄
せた思いの一句である。日中の気怠
さが残っている春夜。便箋を何枚か
反故にしつつ、一文字一文字に細心
の神経を集中して恋の相手に手紙を
書いている男。かりかりと走る軽快
な万年筆の音は、恋文という字音に
ぴったりの音である。筆者も昔のよ
うに恋文を書いてみたくなってきた。

(鬼之介・推薦)

水明

令和5年
6月号

今月のかな女

華の一句

歩く歩く(作品)

筆竜胆(近詠)

上野徜徉(近詠)

風 琴 雪欄作家近詠鑑賞

硯 箱 季音月評

季音「雪」(同人作品)

季音「月」(同人作品)

季音「花」(同人作品)

『水明誌』を繙く

現代俳句鑑賞

山本鬼之介

石山かつ子

境延昭

町野広子

井口俊晴

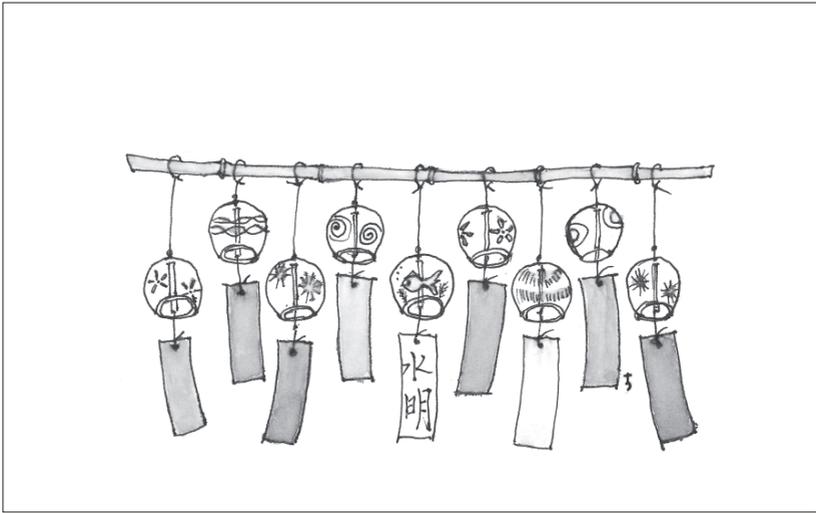
永野史代 西山貴美子
波多野寿子 ほか

鳥羽和風 森本早苗
井上燈女 ほか

日高道を 檜鼻(とは
飛永鼓 ほか

干場達矢

網野月を



水明集

元田亮一 梅澤輝翠
岡田宣子 ほか

水明集作品評

山本鬼之介

44

水琴窟 (水明集四月号鑑賞)

池田雅夫

48

山紫集

50

鼓笛集 (同人作品)・私の一句

56

水明の記事他誌転載

59

水明例会報・各地旬会報

63
・
66

夏季競詠・作品募集

71

全国大会ご案内

72

夏行のお知らせ

73

風声・発展基金御礼

75

後記

76

題字・長谷川かな女 表紙・内田恵子 カット・福田千春

歩く歩く

山本鬼之介

葉桜の道をゆるりと歩き神

健気よな卯浪の磯を一輛車

廃屋の門扉に影を柿若葉

水前寺清子の一步夏の星
光悦寺垣の牡丹に目礼す
夏帯に漆細工の根付かな
所番地の末尾の「上ル」さつき雨
鼻の差の勝馬ゆけり青葉道

筆 竜 胆

石 山 かつ子

風 薫 る 樹 々 の そ よ ぎ も 溪 音 も
正 門 に 国 旗 掲 ぐ る 松 の 花
残 花 飛 花 菊 の 御 紋 の 釘 隠
御 用 邸 に 五 葉 躑 躅 の 白 大 樹
森 青 蛙 雲 を 呼 ぶ か に 昼 合 唱
御 用 邸 を 守 る 土 塁 や 筆 竜 胆
夕 映 え の 風 撫 ま ん と 麦 は 黄 に

何か切つ掛けを掴みたくて行く先を決めずに電車に乗った。ゆつくりと鈍行にゆられ車窓より筑波山を眺めながら着いたのが日光駅。取り敢えず中禅寺行きのバスに乗った。田母沢記念館前のバス停で大勢降りたので私も一緒に降りた。和服の人達もいてとても華やかである。聞くところによると午後から大きな茶会があるそう。

この田母沢御用邸は江戸、明治、大正の建物がよく調和していて、国の重要文化財に指定されている。春たけなわの見事な石楠花。庭の中心となる五葉躑躅の清楚な白、山躑躅の真紅など今を盛りと咲いていた。

上野 徜徉^{しようよう}

境 延 昭

逃 水 や 動 物 園 が 真 正 面
駅 の 辺 り は む か し 寺 領 よ 春 の 塵
霾 ぐ も り 殉 死 の 墓 に 鎖^{じまう} の 門
春 の 風 一 号 館 の 窓 開 く
ア メ 横 は 国 籍 不 詳 春 の 蠅
広 小 路 の 寄 席 に 列 な す 目 借 時
夏 近 し 恐 竜 展 に 豆 博 士

上野は桜の時を過ぎても人で混んでいる。しかし博物館と輪王殿の間を抜けると喧騒はない。塔頭の並ぶ一角に「殉死の墓」がある。三代將軍家光が死んだ時、岩槻城主阿部重次など重臣四人そしてその家臣など数人が殉死しており彼らの墓である。殉死は主従一体と見せ、衆道（男色）の絆の証とされた。江戸の、と云うより人の世の多様な一面を垣間見る想いである。鍵を借りて墓苑に入ると中央に一際大きな阿部重次の墓があった。

風 琴

●季音雪欄作家近詠鑑賞

町 野 広 子

◇春早々（三月号）

風鎮の気儘な暮し去年今年
千両箱の紐がするりと初寝覚

西山貴美子

軸の重しとして下げられる風鎮。新年を迎えししみと軸
に向き合う。風鎮はどんな時も動じない。中七にユーモアが
あり楽しい。成程と納得である。テレビ等の時代劇でしか、
見た事のない千両箱。手元にあるその箱の紐を、するりと解
いたとたんに目覚めた。初夢であった。何とも目出度い夢を
見たものである。どうせなら、せめて蓋を開け、黄金に輝く
大判を見るか触れるかの経験をしたかった。と、それが夢な
のである。

時刻表座右に年酒傾けて
老梅ふむ酸素が少し足りません
時刻表に捲れ疵あり春の卓

ブルートレーン好きが高じて、時刻表のかくれファンにな
った作者。年酒を傾けつつ旅の計画を練る。至福の時間なの
であろう。春の訪れを知らせる梅の蕾がふつくと、今にも
開きそうなのに、待っていると仲々な足である。梅にも、息
を詰めて眺めている作者にも酸素不足を覚える。何時も傍ら
に置き、手捲れが生じる程に愛読の時刻表。旅への夢と希望
に繋がり、明るくウイットに富み筋の通った作者が見える。

◇わが家の窓より（三月号）

咲き初むる蘭や乙女の胸さわぎ
蘭の花咲く順番の律儀なり
あの日あの時思ひの過る蘭の花

茂木和子

五年前の水明全国大会に贈呈された胡蝶蘭を、今は自宅で
三鉢にもなり育っている。毎年それは見事に開く。場所・光
温度・湿度等々管理の難しい花故お見事。今年も咲き始めた
「乙女の」は、花であり作者の心でもあろう。花は下の蕾か
ら咲いて行く。正に律儀そのもので狂いが無い。この美しい
花を見てみると、五年前の大会の情景が浮かび思い出される。
作者にとっては、大切な思い出の花なのである。

庭に鶉・椋来てどつと寒雀
飛び歩く矮鶏の鶏冠冬の庭

緑豊かな作者の庭には、年中色々な鳥が訪れる。鶉は大き
な声で他者を威嚇して追い払う。椋は地を歩き回る。「どつ
と寒雀」に一気に心魅かれた。景色が見えて来る。表現の巧
みさに学ばせて戴いた。矮鶏は小型で脚が短く大人しい鶏で
ある。庭に放し飼われたのか、身軽で小さな矮鶏が愛ら
しく、元々が愛玩用の鶏であり、家族中に可愛がられている
のであろう。花も生き物も大切に育てる快活な作者の、明る
い窓辺や庭が輝いている。

◇本郷界限（四月号）

永野史代

絵馬に絵馬重ねて合格祈願かな

新年の神社には、受験生や親達が合格祈願に押し寄せる。

絵馬を奉納し、お守りを授かり更なる心構えが出来る「絵馬に絵馬」人気の神社なれば尚更のことである。

たましひを持つてゆかれる雪の白

まなうらは暗き白なり雪の夜

数多の白の中でも雪の白は特別。雪景は眩しく美しく、辺りの風景も変えてしまう「たましひを持つてゆかれる」と心を奪われ白い世界に心酔する作者。眼を閉じると暗闇となるが、雪の夜はその暗い中にさえ白を感じ、真の闇にはならない。沈着冷静な作者自身が純白に相応しい。

診察室に昇汞水色の春夕焼

再会は春のあたたかさうな日に

昇汞水は塩化水銀で有毒な液体であるが、嘗ては法定消毒液や防腐剤として使用されていた。危険な液体故あえて薄く色を付けてあったのかも知れない。今春夕焼が診察室を淡く染めている「昇汞水色」の例えが素適。再会とは胸がときめくもの。特に掲句のお相手とは、本当に会いたかった方に違いない「春のあたたかさうな日に」幸せが満ちて来る。

五句共に静寂と色彩を感じ、心の句だと思った。

◇春遊（四月号）

大村節代

山は春善男善女ぞろぞと
松の輪から覗く遠景春の空

いよいよ春。上野のお山には人々が押し寄せる。東照宮、牡丹園、動物園と見所満載。善男善女、老若男女溢れんばかりの人波の中、清水観音堂へと歩を進める。京都清水寺に倣って造営されたこの御堂には、広重の描いた「月の松」を再現。松の枝で作られた小さな輪からそっと覗いた作者に、忍の池の弁天堂が見えた。幸先のよい一日がスタート。

風に舞ふスカーフ手ぐるる春よ春

春遊いよよ足裏の悲鳴あぐ

一万を超えし歩数や春の旅

春は思いの外強風になる事が多い。ふと油断した時、首からフワリと掛けていたスカーフが舞い上る。慌てて手ぐり寄せたものの、風の悪戯に遊ばれる。春を重ねる事で、風を許して微笑ましい。春の陽気に誘われて歩いて来たものの、流石に足の裏に痛みを感じ始める。履き慣れた靴とはいえ、日頃これ程多く歩く事はない「悲鳴あぐ」が現実的で面白い。万歩計を見て驚いた。何と一万歩を越えている。足裏の痛くなるのも当り前と一人納得する。春遊、春の旅、やれやれ遊ぶのも疲れる物である。しかし、それ以上に、目と心の英気を養い、存分に日光を浴びてリフレッシュ。

水明編集長として、連日多忙な作者の充実したある一日。

硯箱

◆季音四月

井口俊晴

梅月夜お鳶に似たるうしろ影

柚木治子

「春宵一刻值千金」。のどかな春の夜、神さびた神社の境内、梅の花が今を盛りと咲いている。と、目の前の石燈籠の陰を横切る人影。何となく婀娜っぽい着物姿は、まるで「湯島の白梅」のヒロイン、お鳶のようだった。「素顔に口紅で美しいから、其の色に紛ふけれども、可愛い音は、唇が鳴るのではない。お鳶は、皓齒に酸漿を含むで居る」。泉鏡花の長編小説「婦系図」の書き出しだ。春の夜の夢のような出来事であった。

白梅の一番に咲くわが家かな

島津初花

花が少ない今の季節に花を咲かせる梅は、なぜか人の心を勇気づける。それだけに、我が家の白梅は私の自慢で、毎年今頃になると胸がドキドキする。だって、この界限で白梅が咲くのは私の家が一番早いだから。世間の知ったかぶりは「紅梅より白梅の方が早く咲くものだ」とか言うが、そんな

事はどうでもよいのだ。

拍手に鳩が飛び立つ梅日和

荒井俱子

ばんばん、二礼二拍手一礼。梅の花が匂う神社本殿の前、夫婦仲良く家内安全を願う後ろ姿が。その瞬間、二人の周りには時の流れが止まったような、不思議な静寂があった。静けさを破るように、拍手の音に驚いた鳩がバタバタと飛び立ち、いつもの境内に戻った。本殿の脇には、お守りやおみくじを売る楚楚とした巫女さんの姿、そして御朱印を買い求める若い二人連れも。

鴨の陣大将どこにも見当たらず

高島寛治

鴨の群が古池を占領して賑やかに鳴き交わしている。よく見ていると、雄か雌か、成鳥か幼鳥か、特に背中の中の羽なんかを見ていると、それなりに見当がついてくるそうだ。ところで、この鴨の陣、リーダーと言うのか、大将と呼ぶべきか、トップ不在みたいなのである。ただ群れて、がぁーがぁー鳴

きかわして春の一日を過ごすだけ。どこかの国と似ているよ
うな。

老梅の気骨の一輪励まさる 川崎道子

おー寒い寒い、もう立春も過ぎたって言うのに……。厚手の
シャツの襟元を掻き合わせ、ぶつぶつ独り言を呟きながら散
歩していると、公園の梅の古木に小さな花が一輪、咲いてい
るのを見つけた。きのう歩いていた時には無かったはずだ。
ごつごつした梅の幹には、所どころ碧い苔が生えていて、そ
の先の細い枝にしがみつくように咲いた白い梅の花は、まる
で寶石のようだ。この花を咲かせた古木の秘めた力には改め
て驚かされる思いだ。

春寒し時折消ゆる街路灯 河野はるみ

立春はとうに過ぎたというのに寒い日が続いている。市役
所での手続きに時間をとられ、日の暮れた道をせかせか歩い
て来た。近くまで来た時に、街路灯の明かりが点いたり消え
たりしているのに気が付いた。「こんな時はどこに言えばいい
のかしら。東京電力かしら、それとも市役所かしら……」。
なぜか寒さが身に染みてくる。正解は「まず始めに自治会に
相談すること。そうすれば、地元の市町村か自治会の所有物
かはつきりするからだ。因みに東電が所有している街灯は一
本もない」そうです。

留守電にロボットの声春寒し 檜鼻ことは

外出先から帰って暗い部屋のドアを開けると、電話機の赤
いランプが点滅していた。少しばかりの期待を込めて「再生」
のボタンを押す。すぐ抑揚のないロボットの声で要件が流れ
る。なんだかマーケット調査か何かのようだ。せめてアルバ
イト女性の声であつたなら、まだしもだったのに……。まだま
だ寒い日が続きそうである。

先生にもらふ無念やバレンタインデー 石田慶子

二月十四日、バレンタインデーのチョココレートの数は、男
の子にとって、女の子に人気があるかどうかのパロメーター。
最近はスマホで「事前運動」を展開、チョコを集める小賢し
い子もいるらしい。さて、戦いに破れ、ひとつもチョコを獲
得出来なかつた子も。そこへ優しい先生が差し出す一個のチ
ョコ。「二十四の瞳」の大石先生みたいにきれいな先生だから、
男の子の無念は募るばかりである。

すがほにくちべにでうつくしいから そのいろにまがふけ
れども かはいいいねは くちびるがなるのではない おつ
たは しらはにほ うづきをふくむである

*鏡花全集には右のように漢字にフリガナがふつてあります。

季音雪



さくら貝 永野史代

目白来る水甕に水満たしおく
爪を噛む癖ある少女桜貝
はなびらのやうなはかなささくらがひ
恋一つ失ふゆふべ桜貝
焼蛤の匂ひ江の島日和かな

春の蠅 西山貴美子

体温の残る春着をたたみけり
マヌカンのうしろを歩む春の蠅
チューリップ黒いドレスを選びけり
チューリップにかがみ寄りたる膝頭
籐寝椅子に笑ふつもりが泣いてゐる

さくら 波多野 寿子

夏が来る 茂木 和子

安曇野や山をはるかに糸ざくら
丹の橋を渡り万朶の桜見に
手のひらに受くる花片花見茶屋
太鼓門出るやお堀の花筏
手ほどの唄は「さくら」よ花の昼

吹雪かと紛ふ柳絮に遊びけり
恐竜展出でて木立の夏近し
木登りの好きな子がゐる夏隣
風向きの機嫌をきいてゐる巢立
枯れ色に吹き曝らさるる巢立あと

石 齧 玉 星野 和葉

緑 立 つ 矢作 水尾

ひと吹きは無数のしやぼん玉に夢
石齧玉ぼわんと弾け明日がある
今日穀雨優しくなりし木々の棘
敷石のすき間すき間よ穀雨かな
人を待つ丸太のベンチ穀雨かな

みどり立つ山のふくらむ宮参り
結納の口上凜と春障子
寺の道落款のごと落椿
涅槃西風鍵かけてある漁師小屋
杉箸の匂ふ飯屋の蜷汁

春時雨 山中みどり

春時雨幌深くして人力車
塗下駄に白の爪革春時雨
桜茶やの白き土塀や花は葉に
言問の団子は黍と春時雨
ビッグシップの蜜蜂今日も恙無く

女文字 柚木治子

カウンターお世辞上手な春裕
佐保姫かも無名のメモの女文字
佐保姫の神秘のオーラ放ち立つ
天辺は一羽の宇宙囀れり
裸婦像の立ち泳ぐがに陽炎ひぬ

薬袋 由良ゆら女

初ざくら心待ちつつ米を磨ぐ
薬袋の一二三四囀れり
病室の真白き闇に紅しだれ
うららかな空ゆく鳩や翼欲し
行く春や鴉のかほのなつかしき

あみださま 網野月を

利休鼠の裏地の羽織涅槃西風
あみださまのあらいはないき涅槃吹く
缶詰のみかん食べたし涅槃西風
ばれたなら白切ることよ涅槃西風
右下にして手枕や涅槃西風

落味噲 石井喜恵

落味噲や一人住ひの母のこと
落味噲やお焦げでつくる握り飯
書き掛けの書状机上に春ともし
半切に筆の走りや夏近し
花過ぎの渾身で立つ古木かな

逃げ水 石山かつ子

掌の中の切符の湿り春の暮
絶妙な良寛の筆やぶ椿
妙義山の巖の鋭角葱の花
逃げ水を越え逃げ水や母見舞ふ
評判の小野小町か春日傘

花 笹 大橋廸代

鶏鳴の太く短し花の城
覆面の女ぞろぞろ城の花
一水を一闪の鳥花笹
浦島草天狗出さうな風の声
はしやぎだす蛭子の幟浦島草

正 夢 大村節代

雑居ビルに幽霊会社おぼろ月
抜け道の先に棲む人沈丁花
穀雨なり蔵のかんぬき門掛け忘る
砂浜の文字を連れ去る穀雨かな
正夢の外国航路のどけしや

揺れゐる 小倉倭子

万愚節 菊池ひろこ

逃げ水を追ひかけ一途女坂
逃げ水の揺れゐる中を安行坂
勾配の程よき坂の夢見草
妙齡の御辞儀の仕草春の宵
髭武者と画廊で出会ふ春の暮

万愚節コロナ乗りゐし豪華船
四月馬鹿部屋ごとに来るノック音
騙さるる先に笑へり四月馬鹿
改装や草餅立ち喰ふ助つ人ら
春夕焼煉瓦まだある丸の内

桜 栢尾 さく子

懐 郷 五明 昇

さくら吹雪一途な少年兵は何処
風のまま散りし同期の桜たち
あの時代語る虚しさ桜散る
わだつみの声の掠るる花の道
瞬いてゐるは君かも春の星

強東風に豪も揺るがぬ御柱おんぼしら
露味噌や山を屏風に父母の墓
秘湯宿木の間隠れの春ともし
青饅や母の遺愛の当り鉢
草餅搗く相老いの息ぴつたりと

雑巾掛け 境 延昭

白鳥の引きし流れの疾きこと
逃水や南へはしる御堂筋
蝌蚪の紐雑巾掛けと言ふ修業
春の月外湯をめぐる下駄の音
願はくば朝寝のままに黄泉の国

カメオ 椎野美代子

ブローチのカメオの巻毛風光る
春の月カメオの巻毛息づきて
万愚節胸にカメオのアルカイツクスマイル
ささやくはカメオの唇よ春の闇
八重桜カメオの美女と共歩き

春 霞 島津初花

涅槃会や日を経て思ふ父や母
忘れぬ北の大地で海胆井
朝鐘の余韻も春の霞かな
園児等の両手に余る土筆かな
桃の花源平といふ札に有り

春 眠 鈴木康世

春眠の中で指折る五七五
春眠の夢に出る顔のつぺらぼう
春眠やとり逃したる夢一つ
春眠の守唄となる雨の音
春眠や忘れたきこと忘れ覚む

青き踏む 田寺玲子

青き踏む明石原人出でし丘
早暁の棧橋ならす春の潮
出航の長き汽笛や鳥雲に
ポスターのピカソの顔や春愁
つちふるや魚籃観音黙し立つ

春 眠 十倉和子

うつとりと春眠このまま逝くもよし
神の木に滝懸りして藤の花
笙の音のひびく城内さくら冷え
水張つて棚田百枚春の月
伐られたる古木の匂ふ春の闇

俳句四季大賞・ 新人賞・特別賞 結果発表

「俳句四季」
全国俳句大会

結果発表

◆巻頭三句

稲畑廣太郎

佐怒賀正美

布施伊夜子

田湯岬

清水伶

浅井陽子

◆今月の華

家登みろく

西村麒麟

◆俳句と短歌の10作競詠

西川火尖

田口綾子

LEGEND

鈴木明

実の会・岡田路光

◆好評連載

成瀬政博

とりあえずの日々

筑紫磐井

俳壇観測

坂口昌弘

忘れ得ぬ俳人と秀句

青木亮人

句の手触り、俳人の響き

大西朋

俳句へのまなざし

神作研一

てのひらの江戸

―古典籍を放する―

藤村公洋

俳句のつまみ

酒井佐忠

本の窓辺

二ノ宮一雄

一望百里



2023年7月号

6月20日発売
定価1100円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

季音月

こどもの日

鳥羽和風

浮雲の影は田にありこどもの日
 恐竜の骨を探しにこどもの日
 釣り上げてそれが昼餉やこどもの日
 初鰹 藁 採る 為の 米 作り
 季語 三つ 列ねて 名句 初鰹

朝 桜

森本 早苗

朝桜いま飛び立たむ白鷺城
 潔さ内に夜桜艶めかし
 うぐひすの土壇場や島の墓地
 春眠を貪る猫の寝言かな
 お揃ひの厚底の靴青き踏む

風光る

井上燈女

菜種梅雨世に置き去りの常夜燈
 観音と五色の綱に風光る
 藍染の糸の雫に風光る
 春の霜出土の田下駄片割れて
 水攻めにあひし城址や蛸蚪生まる

花は葉に

梅澤 佐江

月の土地売り出してある万愚節
 武蔵野の逃水追うて安房の海
 揺り椅子に委ねショパンを春夕べ
 篠笛の妙なる調べ 朧月
 綾糸に彼の日の吾子を花は葉に

囀

大場 順子

朝寝して覚めぎはに聞く水の音
 春眠や少女にかへる妻の顔
 花散るや波郷の詠みし出羽の国
 菜の花を浮き沈みして一両車
 囀のシャワー浴びゆく九十九折

春日傘 松井 由紀子

菜の花や臉の重きバス旅行
ませ垣を越えつ潜りつ昼の蝶
花模様ぱんと咲かせる春日傘
絹張りは昭和の形見春日傘
春の月踏むには淡き影法師

花冷 松宮 保人

詠讚歌堂を満しむ涅槃寺
歛の柄に寄り掛りたり山辛夷
当り籤引きて嬉しや伊勢参
道中の笛巧みなる花の冷え
緩らかや湖北に浮かぶ花見舟

恋どろばう 正木 萬蝶

恋どろばうに鍵甘くして春眠し
唇は夢か現か春眠し
嘶家の扇の変化四月馬鹿
この日より妻は戻らず四月馬鹿
蛤の無口と浅蜷の饒舌と

春満月 丸山 マスミ

祖師堂の一壺に適ふ白木蓮
春宵の賑はひ映す川明り
移住者を募る近郊たんぼ野
ゴンドラを空へ誘ふ春満月
孕馬の厩舎に通す牧の風

春の月 森川 義子

玉章の友の遺稿や春の月
通船の遺構の関の残花かな
白鳥帰る湖に助走の影を曳き
荷風忌や昭和の匂ふ文庫本
春疾風鼓動曳きずる心電図

セルを着て 藤澤 喜久

大皿に潮騒を盛り初鰹
胸きゆんと幼き恋の夏帽子
友逝きて蔵王麓の夏桜
葉桜や冥途の往復切符欲し
セルを着て何処とも云はず出て行けり

春の月 高島寛治

街道は古都の装ひ春の月
春の月ゆつたり歩む女坂
陽炎や砲台跡に校舎立つ
遠足児でかい大仏取り囲む
馬の子やマリオネットの如く立つ

春燈 荒井俱子

朝東風やインコは人語り返す
ミモザの花に風は天才振付け師
春の闇書かれば消ゆる詩の欠片
春の闇ブラックホールある宇宙
春燈の一つ一つにある暮らし

風の凝縮 池田雅夫

天上の風の速さや鯉幟
鍰広の帽子目深や街薄暑
一斉に始まる農事余花の村
借景の白き峰峰新樹晴
新緑の風の凝縮盆栽園

団子坂 山田美佐尾

寺の町何処の墓も桃の花
春深し甲羅干しする亀数多
高僧の一气の文字や黄水仙
浅草の仲見世あたり荷風の忌
荷風忌や文士の集ふ団子坂

踏青 上戸千津子

踏青や街を眼下に歌ひつつ
春選抜の球児の涙吾を誘ふ
裏山の囀り人を憚らず
雲丹届きあの潮騒も聞こえけり
遠方より一期一会の花回廊

目借時 内田恵子

露味噲をトーストに塗り朝の卓
春の風邪ベッドが宙にふはと浮く
ジョーカーの何処に消えたか目借り時
花吹雪耳の羽搏く猫兔
水筒と大きなリュック巣立鳥

春惜しむ 井上玲子

波の音とどく旅寝の春の月
行く春の夜空は丸し星一つ
夕焼雲映して暮るる苗代田
杖の歩で見沼の土手を春惜しむ
母の忌や心を込めて蓬餅

ミモザ満開 町野広子

露味憎の苦味は旨味酌み交はす
露味憎や両党使ひで在りし父
露味憎や父との会話噛み合はず
口堅く蛤眠る夜の厨
ミモザ満開笑ひ転げて女学生

さつば舟 松本光子

店蔵の珈琲香る夏隣
ミモザ咲き生家の庭の生き生きと
祈るかに空にただよふ柳絮かな
城沼の柳絮とまりしさつば舟
庚申さまの小屋に柳絮花となり

春の夜 川崎道子

山寺に人魚の木乃伊四月馬鹿
高楼より流るる琴の音桜の夜
肘つたふ洗面の水花の冷
春眠し講義の聲が遠ざかる
レコード盤は昭和のにはひ春の夜

目借時 福田千春

「サクラサク」を笑ひ飛ばされ四月馬鹿
若者は嘘も検索四月馬鹿
ページ繰る音の途絶えて目借時
カンロ飴溶けぬ蛙の目借時
象が鼻振るを見てゐる目借時

初蔵 西浦千枝子

背に花乗せて向かひぬ投票所
急斜面腹ばひて摘む初蔵
花明り仔牛のやうな黒バイク
黒服の列ゆつくり進む春の野辺
冷湿布背にひやりと春深し

天井絵 野口和子

乙女椿余生楽しむ姉の住む
春ブラウスあわてふためく手アイロン
天井絵煤けし古刹花万朶
囀と犬呼ぶ口笛聞こえくる
電柵を張り巡らせて花の山

芽木の風 松山清子

毛並み良き馬引き出され八重桜
跑足の馬通り過ぐ芽木の風
永らへて幼と並ぶ灌仏会
よちよちと姉の真似する磯遊
行く春やニュースを聞けば国訛

☆

☆

俳句

7月号
予告

6月24日発売

特別作品 長谷川權・中村和弘・伊藤伊那男

予価950円(本体864円)®

追悼

黒田杏子

「季語の現場人」として、多くの場所や人を取材した黒田杏子。生涯、人柄、作品世界をそれぞれの思い出とともに振り返ります。

▼人生と作品

▼追悼文 黒田杏子さんへのメッセージ

特集

五感を深める

▼総論 五感を響かせる表現方法

▼実作指南 五感に響く名句

視覚／触覚／味覚／聴覚／嗅覚／組み合わせ

第57回 蛇笏賞受賞第一作…小川軽舟

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

季音花

春の移ろひ

日高道を

芽柳や鐘の音聞く池の端
 神苑に名残りの花の降るばかり
 青き目の和装美人や風光る
 遠足の列小走りの最後尾
 囀や真ん中に街角ピアノノ

ともだち

檜鼻ことは

ごきげんよう僕のともだちつくづくし
 初蝶や鋏に手を置き顎を置き
 正眼に構へし鋏ぞ龍天に
 桜まじ田舎芝居の幟旗
 廃校となりて十年初桜

麦の秋

飛永

鼓

麦の秋農婦にもある秘密基地
 帰省の子の髪は炎や麦の秋
 制服を脱ぎて語りぬ竹の秋
 言葉なく歩く楽しさ竹の秋
 父の背のかすかな記憶かざぐるま

佐保姫

熊倉

千重子

瑞穂の国をピンクに染むる佐保姫よ
 黄のしづく光る朝や花ミモザ
 丸太の階を降りて露天湯散るさくら
 おぼろ豆腐そつと崩しつ春惜しむ
 野のギターぼろんぼろんと春の暮

ゆめうつつ

河野

はるみ

目覚しは鳥の連呼万愚節
 夢人にほほ抓らるる四月馬鹿
 朝寝して非常ベルなる腹時計
 異邦人の行き交ふ六区荷風の忌
 抜襟の婦人見返る荷風の忌

清 明 青木鶴城

花日和いざ戦はむ席取りの陣
名号の響く古刹や八重桜
山桜たどたどしくも初名刺
溪流のしぶきの跳ねや岩躑躅
清明や墨のほひの命名書

こそばゆき声 曲淵徹雄

切株の年輪に鱗ねはん雪
池に注ぐ水音さやに雪の果
境内に伏せて待つ犬名残雪
「ねばすけ」とこそばゆき声春眠し
花万朶現の闇を糝すごと

分水嶺 保坂翔太

パンの耳揚げたる御八つ建国日
道真の念ひを今に梅見かな
残る雪棚田に灰を撒く老爺
山笑ふ沢音高き分水嶺
大白鳥残りゐて村民となる

らんまん 石田慶子

帳尻を合はす家計簿四月馬鹿
近影はピースの君の入学式
園児らの帽子ぴよんぴよん夏近しい
春だなど夫がぼつんとつぶやけり
縁側の甘い誘惑目借時

花の雲 野田静香

つぎつぎと伸びする猫や鳥のどか
手に馴染む宮島杓子春の雨
花の雲宮彫の龍鎮もりぬ
憧れの自画像に会ふ春シヨール
春愁や水面にゆるる木々の影

隴月 原田秀子

のどけしやお向かひの猫大欠伸
疎覚えの祇園小唄や隴月
まなうらにだらりの帯や隴月
画眉鳥の囀りを待つ垣の内
画眉鳥の囀り「笑ふツグミ」とか

初 蝶 笹本啓子

讚美歌の漏るる園庭花みもど
城跡に残る石垣鳥雲に
定期券初めて使ふ新入生
初蝶が先達となる札所道
渡し舟女ふなこの声のどか

土器研 近藤徹平

弥生日和弥生土器研謝恩会
いぬふぐりマンション街の石仏
平積みの帯の寸評書肆の春
逃水を追って灯台太平洋
春の夢妙に気になる御託宣

蝶の舞 大塚茂子

蝶の舞高く高くへ空になる
聖地公園千の角地に沈丁花
渡し舟そつと畳みて春日傘
長閑しや「永字八法」読み返す
春炬燵一日長者の心地かな

春惜しむ 石川理恵

緑茶より焙じ茶が好き桜餅
鶯餅にくちばしらしき尖りあり
ラーメンで旅締めくくり春惜しむ
惜春やかなり遅れて知る計報
急坂をぎくしゃく下る日永かな

しやばん玉 田中章嘉

篁に風を宿すや啄木忌
葉桜に今日は風雨の一日かな
旅に来て露天風呂にも花浮かべ
しやばん玉母が吹きやる空の旅
扇風機テープなびかす電気店

春の日 下川光子

張りほての馬動き出す万愚節
近づけば近寄る馬や春の雲
幌馬車の蹄のリズムうらけし
花嫁の肩なでてゆく花の風
水飲んで身体重き春の月

ネックレス 松島寛久

海時化て翁漁の酒や春の蠅
若嫁の指輪を外す汐干狩
鱈東風胸毛にきらりネックレス
花見舟湖底の満開散らし来る
春の蠅牛舎の妻のネックレス

草餅 宮崎チアキ

作りたての草餅光る仏間かな
始まりは糸管のコラボ春深し
萌黄色の早くも変はり春惜しむ
名画座に時を忘れて春ともし
丸裸の幹庇ふかに若葉萌ゆ

葱坊主 瀬戸雄二郎

立たされ坊主残され坊主葱坊主
葱坊主反抗心を内に秘め
一列に並ぶな乱れよ葱坊主
偏差値なんて関係無いさ葱坊主
妻一言相槌一言春行けり

花水木 中野 彊

花水木その紅色の夢欲しき
花水木眺めつかじるチヨコレート
花水木枝が手となり花となり
葉桜が川沿ひの道守りをり
葉桜よ今日閉院の札を出す

蒲公英 野平美紗子

蒲公英のわた飛ぶ朝渡航の子
鈍行の窓は額縁春の海
古里やきらりと光る春の海
風渡る川面流るる桜花
老い長閑犬の名出たり隠れたり

春の雷 後藤綾子

傷心の捨て所無し春の雷
春の雷負けじと走る救急車
白木蓮広い公園一人じめ
鞆に乗りて至福の句作かな
春の宵天地香り力満つ

瑠璃草 葛城 千世子

お互ひにマスク欠伸を目借時
手作りの花道具箱春夕べ
浦島草等間隔に竿のぼす
浦島草竿の長さのいろいろに
瑠璃草や深呼吸吸して瞑想す

☆ ☆

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊俳句界 2023年7月号

特集 魂の俳人・村越化石

○インタビュ―荒波力(アンソロジー作家)

○村越化石句セレクション 望月周

○論考「化石の生涯」

○特別エッセイ 三浦晴子

○一句鑑賞

関森勝夫 角谷昌子 田中亜美

関悦史 田島健一 外山一機

グラビエ 俳句界NOW 五島高資

特別作品21句 五島エミ

特集「散文的ですね」からの脱却

○散文と韻文の違い 依田善朗

○散文↓韻文への鍛え方

山下知津子 佐藤郁良 岩田由美 西村麒麟

―追悼― 藤原龍一郎 谷口慎也 池田澄子

秦夕美 大井恒行 松岡耕作 田中葉月

★セレクション結社「三日月」川越歌澄

私の一冊 衣川次郎「青岬」

対談 佐高信の甘口でコンニチハ！
羽山みずき(演歌歌手)

「俳句界」投稿欄 一流選者14名！
日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。

株式会社 文學の森 株式会社 文學の森 株式会社 文學の森
お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

『水明誌』

を繙く

(水明四月号)

干場達矢

(「トイ」
編集発行人)

賓頭盧に溜まる暇なき春埃 山本鬼之介

賓頭盧はなでると病気を取り除く功德があるとされる仏様だ。最近、長野・善光寺の「びんずる尊者」像が盗難に遭ったニュースが報じられていた。仏像はもとより宝だが、触れることができるそれへの人々の愛着はひとしおだろう。

賓頭盧の頭は多くの人たちになでられたため、てかてかに光っている。顔の造作がすり減って、のっぺらぼうになつているものもある。不気味なような、奇妙な愛嬌がある。

思えば2020年からこの3年、私たちは「触れる」ことを極度に恐れていた。新型コロナウイルスである。接触感染の可能性は低いと言われながらも、電車の吊り革を握ることも躊躇した。ものみな汚れていると思ひ込んで、外に出たら何にも触れまいと神経質に暮らしていた。

賓頭盧もこの間、人に触れられることはなかったはずだ。それがいま、春埃が溜まる暇もないほど、次から次へと参拝客に頭をなでられている。人々は心おきなく物に触れるよろこびを噛みしめているだろう。「コロナ」と言わず、世の中の明るい変化をすくい取った一句。

匂ひなきモデルルームや春寒し 柚木治子

モデルルームに入ると変な気分になるのは、そこが住居としてしつらえられていながら、生活感が一切ないからだ。リビングにはテレビとソファがあり、しゃれたペンダントライトの下のダイニングテーブルには一輪挿しの花瓶が置いてある(そしてそこにある花はたいいてい造花だ)。室内は影という影を追い払ったかのように明るい。装われた親密さと裏腹に、よそよそしい雰囲気満ちている。

それはまた匂いがしないからでもある。もちろんキツチンは一度も炊事に使われたことがない。掲句はその違和感を書いた。「春寒し」はモデルルームにある嘘くささ、素然とした気分を言い当てた適切な斡旋だろう。

少し深読みもしたい。生活空間がモデルルーム的に清潔であること、無臭であることを求めてきたのが現代人である。コロナ禍を機にそんな私たちの潔癖さはますます高じた。人が人を遠ざけ、そして誰もいなくなったというとシニールだが、「匂ひなきモデルルーム」という措辞に人間不在の世界というグロテスクなイメージも重なって見えた。

現代俳句鑑賞

網野月を

根元まで見えて花瓶の黄水仙

〔俳句四季〕 4月号・空の中より

岩淵喜代子

花瓶がガラス製なのであろう、活けた黄水仙の花茎が長く切り取られていて、根元まで見えたのである。地面に生えてあるときは、花にばかり注視していたのだが、花瓶に活けたことで根元にまで作者の関心の眼差しが注がれたのである。その新鮮な気づきに感動が呼び起こされたのである。他に「枯れきつて麒麟の首は空の中」「パソコンに鯨の泳ぐ初仕事」がある。

わたくしは滝の心に由来する

〔俳句四季〕 4月号・わたしの歳時記より

山下久代

座五の「滝の心に由来する」の読解がこの句のキーになると考えられる。まずは「滝の心に」であるが、滝という存在にと解釈するのが順当であろう。滝を鑑として「わたくし」なる存在を照らし合わせることで、という意に解釈できる。とすると「由来する」は自らの存在意義が確かなものとして意識される、と解せば良いのであろうか。

句中に具体的な形を有するものは「滝」だけであって、読

者の「滝」に対するイメージ如何で解釈が異なるところであろう。「わたくし」は詠み手が判明してはじめて具体性を帯びるのであって、不完全な形しか結晶しない分、「滝」との相対性を持ちえずに、途方に暮れる読者もあるかも知れない。それが詩だというならば詩なのであろう。他に「鬱金草ここにも海を置いてみた」「春蘭の耳を探そう四分音符」(俳誌『形象』第519号より)がある。

ここにも底というもの冬日中

宇多喜代子

父も母も冬日に椅子を置いたまま

轉に合わせ歩幅をゆるめた

〔俳句〕 4月号・寒明けより

第一句目は、納得の句である。心の底を意識することで座五の季語、冬日を捉えているのであり、また冬日中であるからこそ心の底を探し得たとも解することが出来る。サイエンスで解すれば必要十分条件になっているのであるが、サイエンスの辿り着く真理を超えて芸術の言葉が新たな真実を想像したように思う。第二句の「父も母も」は既に鬼籍に入られ

ているように筆者は読んだ。かつてお二人が愛用した椅子は今冬日を浴びている、と解した。第三句は、囀に気づいた作者の歩調のゆるみを詠んでいる。歩調のゆるみも同じく作者自身が気づいたことなのである。気づきと感動は心の揺れの二次的な経験があつてこそその叙述方法なのである。

切株のどこに触れても暖かし

行川行人

(俳句) 4月号・鳥雲により)

座五の季語「暖かし」の意味していること、つまり春というものの総体を切株にフォーカスして表現している。逆説的であるが、季節を感じ取るときの触覚というものの曖昧さ、相対性の中に多数者の共通理解を引き出しているのである。触覚の現実はいかしたら異なる場合もあるのだから、言葉に固定することで、言葉で理解することで言葉の上での多数者の理解を得ているように思う。他に「鳥雲にテレビアンテナ屋上に」がある。

春満月戦車渋滞していたり

中内亮玄

(俳句) 4月号・戦禍の無謬 春より)

文字通り反戦の句であると解した。上五の季語「春満月」は臆であることを賞すのであろうが、この季語の本意、本情には、加えて充実、溫和、平穩であることが象徴されているように考える。その季語とは真逆の中七座五の取り合わせに緊張感以上に戦車への作者の嫌悪感を感じ取るのは筆者だけであろうか。作者は、「渋滞していたり」と揶揄を込めることも忘れていない。金子兜太師の遺志を受け継いでいる。

葉が枝を打ち蠟梅の咲きはじめ

黒岩徳将

(俳句) 4月号・蠟梅より)

実によく見ている、観察している句なのである。物の本には葉より先に開花する、と一様に解説しているものだが、そのようなことはない。植物は蠟梅であっても様々なのだ。だからこそ葉が出ている蠟梅を見出した時の作者の感動は、作句の意欲を掻き立てることになったのであろう。他に「セーターやまんばうの口半開き」がある。

紙で切る小指の先に秋の風

村井康司

(俳誌「鏡」第四十六号・両の肘より)

連作十四句の中には、掲句の「小指」の他に「首」「踵」「両の肘」「腹筋」など身体の部位を詠み込んでいる句が多い。緊張感と親近感、そして得体の知れぬ空気感を作り出している。これが作者の世界観なのだが、「楽器の傷」まで持ち出して、楽器に一肌以上の愛着を示しているところが、諧謔性なのであろう。他に「数へ日の豊に軋む両の肘」「秋霖や楽器の傷を撫でてをり」がある。

あかときの夢(ゆめ)まるとる牡丹かな

柴田獨鬼

(句集「あかときの夢」より)

今年二月に深夜叢書社から上梓された句集である。目利き齊藤慎爾氏のお眼鏡に叶った句である。上五の「あかとき」は文字通り暁の事であつて、座五の「牡丹」の季語が効いている。他に「たましひの雫のやうに春の月」「うつし世のものみな揺れて水陽炎」がある。

山本鬼之介 選

水明集

風に乗る微かな香り山桜
囀りや道なき道に誘はれ
行く春や少年野球の球拾ふ
清明や人影消ゆるニコライ堂
深爪をきつく咬む夜春の電

さいたま 元田亮一

梅澤輝翠

逆上がり地球蹴り上げ春休み
海鼠壁あの日そのままに紅椿
定位置の店番おぼば目借時
陽炎や坂の下から駆けてくる
入学や振り返らずにエアポート

我が名呼ぶ細身の影や春障子
繊細な組子際立つ春障子
縄文の遺跡の空に雲雀鳴く
糶声の一際高き桜鯛
彼岸西風手向けの花の揺らぎをり

さいたま 岡田宣子

たつぷりと光吸ひこむ春の土
白鳥帰る家族のきづな深めつつ
春の海幻視消えゆく村景色
白鳥帰るいのちかがやく飛翔かな
卒園児個性確たる「はい」の声

山岸久美子

あちらこちらに春の鼓動の聞ゆる街
憂鬱をふうはり癒やす春茜
朧夜や映画に粹な悪党が
吉日に娘二十歳の雛飾る
白魚や搔揚げかはた唐揚げか

平塚 丸屋詠子

「旗日」と申す人がゐる建国日
春の田に響む農機の試運転
殿方の投ぐる視線や春シヨール
春眠や寝て一畳の小宇宙
啓蟄の畑に土竜のマンホール

伊奈 菅原卓郎

啓蟄やネイルサロンに予約入れ
少年の春空破く逆上がり
境内に佇むをんな白椿
格子戸の並ぶ川筋糸柳
昨日までとは違ふ横顔卒業歌

さいたま 菅原真理

ポッキーをワイングラスに春の月
手土産は羽二重だんご雛の客
引く白鳥のもぐもぐタイム旅支度
春愁や冠動脈の透視受く
春昼や医者を直視のさかまつげ

さいたま 清水桂子

よちよちの七転びして青き踏む
起き抜けの足に力を木の芽張る
啓蟄の土やはらかに夜の雨
初蝶のミニSLに飛入りす
安眠のアロマに満つる春の闇

熊谷 越田栄子

忘れ雪大志を胸に搭乗す
春の夜や恋文を書くペンの音
城望む旅宿の朝餉蜩汁
涅槃雪故郷を離れゆく列車
全身で若鮎魚梯上りけり

反町 修

ターゲット誰にしようか四月馬鹿
色褪せし笑ひ袋や四月馬鹿
咲き映えて空へ溶けこむ初桜
プライドを胸に仕舞ひて目貼剥ぐ
馬齢積む男独り居目刺焼く

さいたま 篠崎紀子

剪定や「いせ辰」被る男前
吉野山今年はひとり初桜
二日酔ひしやきつとせよと山葵漬
神童はバーの店長四月馬鹿
叔父の霊祀る靖国初桜

新 曆文

濃く淹れる今朝のアッサム別れ霜
初音聞く古刹の長き男坂
子は三つ吾二つ食ふ蓬餅
三千の梅の守りする老庭師
蟠り解かすきつかけ万愚節

池田珪子

溜池の堰切る勢雪解水
春浅し吉報を待つ朱印帳
戦争の終りを騙る四月馬鹿
一駅の徒を厭はず初桜
あと一步踏み出す勇氣山葵漬

皆川更穂

白木蓮はらり聞き取りテスト中
職を辞す時ぞ柳絮の来て止る
春時雨かつて州崎にパラダイス
ブリューゲルの魚人を呑む四月馬鹿
蜆焼く雨の洪谷は煉瓦館

さいたま 森下山菜

啓蟄の珈琲ゼリー崩したり
クレソンの大盛りに笑む老紳士
メンチカツ食ひ十一位春句会
桃色を多めに残す雛あられ
花冷やラーメンに浮く煮干しの眼

さいたま 吉川拓真

蓬摘む妻を薄目に肘枕

小林京子

四月馬鹿実しやかにプロポーズ
急ぐ足止めて眺むる初桜

新井孝磨

薄口に手鞠毬ふたつ雛の膳

芹摘むや水の明るき休耕田

受験子の皆無口なり駿河台

クレソンの小束キッチンに川風

越谷 阿部幸代

路地裏にへのへのもへじ初桜
草の芽や靴紐結ぶ山男
山葵漬鼻を抜けたるホームラン

千坂平通

あたたかや缶のドロップかたことと
今更の光回線春炬燵

啓蟄の地を這ふ一葉追ふ子ども

啓蟄の畑の目覚めや耕運機

風通ふ川に揺らめく柳影

さいたま 西幅公子

蜆の身味はふ舌の奥深く
全快の母の手を引き観る桜
西行の武士の生き様雪の果
溶くる水流れの清き雪の果
穴道湖の蜆砂吐く魚市場

村杉清吉

老桜隣家を守る咲きつぶり
花の雲に飛びのる威勢逆上がり

野良の勝ち腹噛みつかれ恋の猫

白蓮や教会の鐘鳴り響く

けんけんばおかつば揺るる糸柳

名画座のポスター見入る春日傘
春疾風仮名のポスター剥がしけり
堀割の屋台の暖簾柳の芽
陸橋の階段隠す雪の果
はらわたの身にも嬉しき蜆汁

光年の彼方の光春北斗

白鳥帰りスワンボートの残されて

金平糖園児集ひて雛祭

翡翠がそつと見守る捨雛

内視鏡に嘘見破られ四月馬鹿

さいたま 飯田忠男

大曲り都電を降りて初桜

見得切つて土手の古い木の初桜

傘寿きて好きな女と山葵漬

男と女嘘が実に四月馬鹿

新宿の夜に終止符ばたん雪

さいたま 渋谷さいち

耕牛の瞳は優し打たれても

春疾風色を打ち合ふ袋絵馬

野晒しの大根の列エンタシス

芹摘みの軽軽と跳ぶ小川かな

卒業子かちりと白き卵割る

本橋稀香

朝日子に羞づる風情や初ざくら

妙高を遠景にせし初桜

初ざくら駅ロータリーの巡りから

定宿の山葵漬食む朝餉かな

山葵漬小鉢に香る奥座敷

霜多光代

踏石に手をつき侍る赤蛙

学帽は少し大きめ山笑ふ

寒明や真鯉そろりと動き出す

点線の伸びてゆく空鳥帰る

水門へ一直線の土手青む

上尾 横山君夫

所在なく日捲りめくる春の風邪

輝ける瀬波くぐるや上り鮎

ゆくりなく山路開けて桃の花

安達太良の山麗しき春の雪

新型のコロナ五種へと卒業期

加藤でん治

老農の太き動脈田を返す

柳の芽分けて見遣るや閻魔堂

直木賞蹴りし人あり蜷汁

トランプの独り占ひ春の雲

春の夜や小半酒に恋の夢

さいたま 染谷風子

浄土へと流れゆくかに春の川

ゆつくりと春の水鳥利根びより

今朝もなほ砂を吐きゐる浅蜷かな

浅き瀬に引鴨数羽風を待つ

真青なる空を舞台に藪椿

杉戸 佐々木史女

梅林ゆく紆余曲折のふたりかな
飛梅や太鼓の響きまつすぐに
仕立服届くる春の海岸線
白魚の透きし命をいただけり
若芝を双子よちよち右左

川崎 鈴木玲子

店名は「天手占舞」よ山笑ふ
人生を再起動して風光る
野仏の傍に座禪の蛙かな
ランドセル小さくなりて卒業す
故郷へパンダは春の雲に乗る

さいたま 綿引まりこ

感動の街中「つるし飾り雛」
制服に湧き立つ希望山笑ふ
里山の蛙合戦秘境めく
梅が香や枝から枝へ鳥の影
春一番とんぼ玉選る陶器市

春日部 諏訪サヨ子

再生の亡父の声聞く春の暮
果樹園の伐採跡や山笑ふ
現金な国と対峙や木の芽時
入社日を待つ新スーツ山笑ふ
初桜細き枝さへいとほしき

山戸美子

確約を取り付け帰路の春の雨
水温むいちにち光る波の群
蜆汁ひらく潮の音きかんとす
水温む猫の昼寝の長くなり
旅の宿夫と向かひて蜆汁

川口 新井のり子

春の雲つかず離れず風まかせ
あけぼのの赤き屏風ぞ春の雲
桜鯛姿のままに炊きあがる
一尾千円朝どれの桜鯛
彼岸西風御百度を踏む女性かな

秋谷風舎

確実に今年もここに牡丹の芽
「ごめんね」の代はりに作る蜆汁
大試験合否確認出来ぬまま
水温む虫負力士の勝名乗り
水温む厚きタイツを脱ぎ捨てて

木村小麦

薔薇芽吹き処女航海の外国船
花言葉「愛」を見つげに薔薇芽吹く
シニアの学び友の輪ふえて卒業す
雨戸開け閉めそろりそろりと鳥の巢よ
店頭を飾る雛や城下町

竹澤和子

春の服銀座のカフェのモンブラン

鳥の巢や二輛停車の無人駅

山里の朽ちたる家の藪椿

白鳥引く広き湿原もの淋し

江の電に揺られて春の光る海

さいたま 野村美子

東京 山中いちい

しゃぼん玉飛ばし合うたる友はいま

軒桁の崩るる先に黄水仙

風光る手振り大きくガードマン

蔦若葉売り地の札を隠しをり

下萌に境界線の隠れをり

伊予 向井章子

さいたま 樋口元美

ざらつきし未練の盃よ春の塵

藤菜一輪若き二人の仲直り

鼓草負けず嫌ひの顔をして

春塵と身の錆払ひ一人旅

光となりぬ川のせせらぎ春障子

吉川 杉浦理恵

春日部 仲田利子

ほつれ髪そつと手直し雛納め

腕時計は爺の借り物受験生

皆の顔分らず終ひ卒業す

置き土産の鼠わが家へ春一番

たも網を構へ待ちわぶ春の川

和歌山 高橋満耶子

草加 外村紀子

春の昼尾水道振り返り

花董五百羅漢に探す貌

迷路めくねぢれ石段春の昼

由縁なく名もなき坂に濃き董

尾道に鐘ひとつ沁む春の昼

彼岸西風一枚羽織る母のもの

彼岸西風塔婆の文字の新しき

セーラー服白襟光る入学式

桜鯛姿造りの舟盛りよ

酒は地のもの昆布締めめ桜鯛

さいたま

樋口元美

武甲山削られしまま山笑ふ

動画見て落味喰作る中学生

我が住処と庭の懸樋に蛙鎮座

春うらら歩道橋から見る車列

落椿姿そのまま源氏山

指揮者なき蛙の輪唱千枚田

足音に隣時鳴き止む田の蛙

遠足や児童の歓声動物園

山笑ふ小さき背中の中のランドセル

陽春に笑み愛らしきわらべ地藏

鳥の巢やどんぐり山に巢のオブジェ
卒業期むすめの部屋にのこる香よ
制服のてかり際立ち卒業す
店閉ざし残る看板桜咲く
首飾りにしたる椿や寺の隅

さいたま 小川洋子

青空をかきまぜながら蝶々来
生垣に即かず離れず紋白蝶
初蝶やありふれた日のサブライズ
日光の探訪気取り一人静
一服の湧き水光り一人静

さいたま 緒方みき子

蔵の町柳見上ぐるさつぱ舟

森下美智枝

蝶々にあいさつする児参観日

所沢 飯室夏江

忠敬の地図の確かさ川柳

小枝とハンガー集め鳥の巢完成す

春の夜ホームラン打ち大逆転

知らぬ間に里の大樹に鳥の巢が

思ひ切り声を上げたし初桜

鳴海順子

かたくりの花乙女等ひと恋占

さいたま 森美枝子

三階の高きに咲きし初桜

四月馬鹿地団駄を踏み悔しがり

薄紙で覆ふ女雛と男雛かな

花束を手に手にポーズ卒業す

眼美し雛吾がために買ひ求む

高原和子

踏み石に庭下駄在りし沈丁花

寺町知子

透き通るひひなの面の愁ひかな

雛飾る心優しくなりにけり

やはらかき紙にくるみて雛しまふ

鳥の来て巢箱の中をうかがへり

点々と生氣満つ紅落椿
雨音に二拍三連刻む春

何事ぞと構ふる闇夜猫の恋

浅蜩壳の声待つ窓辺風通る

青天の濃き場所^{ところ}にあり初雲雀
葉の花や時折揺れし葉の緑
泥濘^{ぬいろう}に踏みこむペダル春の道
花盛り帝都をめぐる荒川線
風光る寺の家紋の三つ巴

さいたま 石関六弦

生涯の出会いに感謝彼岸西風
魚つりの予定変更涅槃西風
水槽に駆け寄る園児桜鯛
化粧塩付け見得を切る桜鯛
また会へし輝く花の季節かな

さいたま 綿貫ひさの

桜鯛家族で祝ふ夫の喜寿
子午線の潮の流れに桜鯛
彼岸西風終活ノート書き直し
自然光注ぐ新駅初桜
思ひ出をデータ化せり弥生尽

小駒さち子

刻の過ぎ大きな一步蝸牛
名も無くて家の仔となり夕焼雲
螢火に火傷を負うて胸の内
一輛車夕焼の裏へ着きにけり
三色のアイスクリーム海の風

所沢 関根千恵

膏薬に祖母の面影^{おもかげ}冴え返る
枕辺の春にすつぽり眠り姫
尾羽振り^{おしほ}はるへはるへと春の鳥
春の江に天より投ぐる銀の帯
朝風に燃え立つ命草若葉

大阪 飯塚智恵子

楽しみは年に一度の野蒜摘み
新聞に線引き覚ゆ春の夕
亀鳴くや水替へ餌を与へたし
春満月行く先いづことつきて来る
童謡が聞こえてきさう春の川

和歌山 南條さわゑ

名の消えし雑巾絞^{まじり}り卒業す
思ひ出や卒業するもなげ哀し
三途川^{さんずがわ}清め流るる桃の花
桃の花朝の鏡に白く咲き
老重ね健康第一蜩汁

草加 持永喜夫

生まれたてのブルー春の朝空は
土恋し土が恋しと花は落つ
白髪のパレンタインのチョコ選び
春シヨール肩からずれてうきうきうき
ミモザ散る追ひかけつこの坂の道

さいたま 奥山粉雪

指先に緑の香りよもぎ餅
合格にでんと座るや桜鯛
使ひ込みし義父の歳時記白木蓮
褒められて厨房香る分葱ぬた
四世代笑顔ほのぼの雛祭

和歌山 嶋田洋子

苔段のりす戯るる春日向
お下げ髪卒業証書手にあまり
遠回りして見つめをる桃の花
桃の花迫りし家々霽のなか
美味しいと言はれて弛む春の宵

さいたま 鈴木香音子

蒼天の下凍蝶の翅薄し
凍蝶を見しことのみの日記かな
鍋奉行の出番の多し寒の内
目をつむる温泉の猿寒九かな
コンビニのレンジ忙し寒四郎

さいたま 後記朝香

遊園地リズムに乗りて柳揺れ
啓蟄や自転車乗りを覚えし子
柳揺れ少女お使ひパン一斤
胸の霧晴れて春満月仰ぐ
啓蟄や思ひがけずの佳き知らせ

宮代 関谷多美子

風に鳴る絵馬の音にも春きたる
解体のざわめき続く春の午後
快音を響かせ練習春の昼
寺の門葦並ぶや南無阿弥陀仏
植込みの葦密なり職人業

東京 深沢りこ

大手振る理系の女子や風光る
そつと出す喧嘩のお詫び草の餅
露の臺あんよ一步に拍手わく
水温む親子で洗ふズック靴
水温む魚を探す子の眼

さいたま 湯浅和

腰痛をだましましたまして蓬摘む
挿し芽より育て育ちし沈丁花
とりあへず内裏雛だけ飾りけり
薄氷や緋目高の影すけて見ゆ
春炬燵夫は資料にうづもれて

鬼石 榊原聰子

控へ目に椿ほぐるる母の庭
大和路のとつぷり暮れし蕨餅
啓蟄や沸いて出でたる児らの息
あれだけがこれだけになる嫁菜飯
春の泥見守り隊の旗先へ

大阪 遠藤人美

はつきりと目覚めうながす蜆汁
はじめての孫の手料理蜆汁
深呼吸春の便りは確かなり
洗顔の朝の目覚めの水温む
早朝のラジオ体操春確か

川口 田村福美

紅顔の力士掲ぐる桜鯛
竜宮も桜鯛舞ふ宴かな
リバイバル映画の帰り彼岸西風
涅槃西風鳥インフルの処分地
満開の桜の下や忠魂碑

さいたま 横山礼子

白魚のふはふはうれし喜寿の夫
ひな祭り遺品整理に父母の愛
御所前の若草摘みし二人連れ
T字路を右へ沈丁花に誘はれ
喜びと覚悟を持ちて卒業す

東京 畑宮栄子

雨上り土擡ぐるや露の臺
露の臺「まつてました」とレジの籠
機械化のトラクター行く田打かな
水温むベンチの姉妹笑み栄ゆ
忙しき神様の春絵馬の数

武田重子

自転車の荷台にボール春休み
細き足ランドセル背に入學す
蒼天にボール蹴り上げ卒業す
相槌を打つ夫のゐてうらけし
同じ門出で三代の卒業歌

さいたま 羽島秀子

餌運び今日で休業巣立鳥
首かしげ見送る親よ巣立鳥
一番手に飛び立つ勇氣巣立鳥
花曇一氣に晴らすホームラン
桃色の庇の宴や花曇

小田美智

久々にピアフを聞こう春の闇
春の闇ワインボトルは上げ底に
閃めきし言葉何処へ春の闇
波音の心地よき宿春の闇
蓬餅女人高野の道すがら

森 和子

いたづらに食べちらかすも雀の子
己大きく口慎しむな雀の子
気まぐれは親譲りです春の雲
結論を出さぬ男や春の雲
啓蟄や小さきもの皆一直線

川島夕峰

父来るお重ぶらさげ草の餅
春の闇懐中電灯四個買ふ
指先に心を込めて蓬餅
なにびとか会話ひそひそ春の闇
蓬餅香りも映り分ちあふ

さいたま 落合和枝

紙ひいな眼に大小や姉いもと
音ひびく高架の下や烏の巢
雛祭父は米寿を祝ひけり
遍路宿牛飼眠る牛の上
むねあげののりとをぬうてつばめくる

山下ユリ子

桃の花ひ孫と並ぶ卒寿の背
幼子のごっこ遊びや桃の花
菓子分ける小さき指先春日和
卒業す第二ボタンの鈍き色
桃の花術後日記は四冊目

橋爪さなえ

まんさくの花ゆらしをり風の音
黄砂来てぼうつと高速道路かな
黄砂降りへへののもへじボンネット
夫婦びな手を取り合うてをさめらる
薄紙を顔にやさしく雛をさめ

東京 柳父はる

別腹のショートケーキや雛祭
ぼこぼこミルクティー注ぐ花曇
春暁や隣る走者の息づかひ
引継書整ふる朝花曇
スタートの合図あつたか巢立鳥

さいたま 鈴木敦子

顔みせてむらさきの花ヒヤシンス
竹林に姿はみえず初音かな
顔よせて誰を待つのかすみれ草
水仙の仏間明るき香りたつ
裏庭の紅梅の花ちり初め

鬼石 加藤ナヲ子

三月で九十八は通過点
紙袋子猫の友の第一位
春風や歩行むづかし友と我
喧嘩風糸に硝子の粉を塗り
風揚げて子供に還る風が吹く

さいたま 川村 治

好天の梅の祭典人の波
小川も大河の如し残る鴨
水温む池の面を行く鯉の口
祖母から子女系で守る雛かな

鈴木藻好

縁側に媪座しをり桃の花
百歳の母を訪ふ桃の春
初桜野点の席の客となり
桜まつりは雨りんご飴の雫

目覚ましの鳴らぬ休日花曇
手の甲の皺頭はなり花曇
鳴龍の声降りにけり花曇
産毛揺れ一時群るる巢立鳥

絵本手に過る記憶や長閑なり
若草や風と光に初々し
大地から吹く風やさし若草を
剪定やこぼるる日差しのびのびと

身に纏ふ麻布白し春の風
桜鯛入荷の幟翻る
梅祭どんぶり買ひて軽き足
彼岸西風同窓生と師の墓へ

天寿とは言うても悲し花筏
尻もちの痛みが取れず山笑ふ
つかのまの桃の花見や茶の稽古
花の下笑へとシャッター切る息子

父の倍齡近付く八十路春
鎌倉や畑地で春の富士拝む
我が実家部落の行事富士詣

さいたま 岡田芳春

草加 吉田十三子

さいたま 湯浅節子

糸井しるく

藤沢 小島喜代子

藤田寛二

特集 俳句と風土

巻頭作品10句

特集巻頭エッセイ―高野ムツオ
風土性豊かな秀句・五〇句選―宮坂静生

大木あまり・寺井谷子・中村雅樹
野中亮介・橋本榮治・坊城俊樹
正木ゆう子・山田貴世

俳壇

7月号

6月14日発売
定価900円(税込)

巻頭エッセイ
照井 翠

八木健遊 滑稽俳壇

四季巡詠33句〔第Ⅲ期〕…佐怒賀正美・武藤紀子

新連載 俳書の森を歩む…栗林 浩

連載 俳人の住む町…渡井恵子・はりまだいすけ
俳句文法 そのが問題そのがポイント…井上泰至
名句のしくみと条件…坂口昌弘

私の本棚・私の一冊…四ッ谷 龍
十二か月添削教室…前北かおる

俳句と随想12か月 井上論天・清水和代

本阿弥書店 〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03(3294)7068 振替00100-5-164430

作品評

山本鬼之介

風に乗る微かな香り山桜 元田亮一

山桜は、本州の東北南部以西から九州の山野に生えるバラ科の落葉高木と説明されている。花見で慣れ親しんでいる染井吉野と明らかに異なる点は、葉と花が同時に開くことで、染井吉野とちがつて花が葉に隠れがちなので目立ちにくいのが、反面落ち着いた風格があると思う。江戸時代末期に染井村の植木屋から新種の染井吉野が売り出され、世間に広く行き渡るまでは山桜が花見の主役であったそうで、今もつて奈良の吉野山や京都の嵐山の山桜が名を馳せている。

作者はいま山中で数本の山桜に囲まれている。手の届く小枝に手を伸ばし、花弁に鼻を近づけその微香を嗅いでいる。其処へ吹き下ろしてきた一陣の山風。そこでこの一句が生まれたのであろうか。山桜を、色ではなく香りで表したところに作者の佳きセンスを感じる。

海鼠壁あの日のままに紅椿 梅澤輝翠

時代色豊かな海鼠壁から、或る旧家の土蔵が浮かんでくる。そして、その傍らに咲いている紅椿。土蔵の壁は多少色褪せたように見えるものの昔のあの日と変わらず、紅椿も同様に土蔵の傍らにひっそりと咲いている。青春期の頃、旧家の息子と恋仲であった女性が、数十年の時を経た今、土蔵の側に立つて当時の想い出に浸っている。そう、別離の切っ掛けとなったあの日のことを……。土蔵の海鼠壁が、あの日と同様にこの女に威圧感を与え、紅椿があの日の女の心と同じように淋し気に咲いている。…と、こんな物語を筆者に書かせた一句であり、海鼠壁と紅椿の双方に作用する「あの日のままに」の用法が巧みである。

縄文の遺跡の空に雲雀鳴く 岡田宣子

野原や畑から飛び立ち、鳴きながら高空へ昇って行く雲雀の姿は、今も昔も、そして、気の遠くなるような大昔の縄文時代においても同じであったろうと思わせる俳句である。古代の遺跡から発掘された土器や埴輪などから当時の人々の生活様式や風俗を知り、想像をたくましくする。そして、その時代と現代を結びつけているのが、中天から地上を見下ろしている雲雀なのである。

春の海幻視消えゆく村景色

山岸久美子

日本では富山湾に発生する蜃気楼がよく知られているが、その場所へ行けば何時でも見られるものではなく、北欧の夜空を染めるオーロラのように、遭遇できればまことにラッキーなのであろう。富山湾で見られるビルや煙突などではなく、掲句のそれは、村落の景色とあるから、何か一段と長閑さを感じさせる。

朧夜や映画に粋な悪党が

丸屋詠子

街の映画館ではなく、テレビで視聴している映画のように思えるが、それが邦画なのか洋画なのかは断定しかねる。何れにしても、映画に悪役は付き物であるから注目してほしいが、粋な悪党と言われると簡単に見過ごせず、内外の男優の顔を思い描いてみたが、顔と名前がなかなか一致しない。やはり歳のせいかな。昔のフランス映画にギャング役で登場したアランドロンもぴったりではなからうか。粋な悪党に思いを寄せる女に自分を投影するのに、朧夜が最高の雰囲気である。

春眠や寝て一畳の小宇宙

菅原卓郎

実に格好いい俳句である。春眠の心地よさを物の見事に表現している。手狭な部屋の畳に敷いた蒲団であるから俳句に

なるのであって、洋間のベッドではこう上手くはゆかない。地球から放り出されて、宇宙をさ迷う悪夢を見るかも。

格子戸の並ぶ川筋糸柳

菅原真理

格子戸のある建物が軒を連ねていて疎水のような川があり、川筋に新緑の葉をつけた柳の枝が揺れている景色を思い描くと、千年の都である京都をはじめとして、江戸時代から育まれてきた文化を色濃く残している金沢や、その他に栃木・佐原・八尾・郡上八幡などの地名が浮かんでくる。さらに右の条件にぴったりの土地はないかと調べた末に岡山県の倉敷市に行き着いた。十七世紀の江戸時代初期に幕府の直轄地Ⅱ天領となった倉敷は、倉敷川の船運によって栄えてきた。白壁や海鼠壁の土蔵と格子戸の商家が並び、倉敷川の両岸には柳の並木が続いている。むかし米や穀物をはじめいろいろの物資を運んだ荷船が、今では観光船に代り、乗客を楽しませている。筆者も居ながらにして昔の情緒に浸ることができた。

啓蟄の土やはらかに夜の雨

越田栄子

啓蟄は新暦の三月五日頃とされているが、その解説文を読むにつけ、また、気分的にも体感的にも春の到来を感じる時期である。寒中から寒明けの時期の固かった土がしっとりとしてきた感じが啓蟄の土なのであろう。其処に夜の春雨が音

を忍ばせて降っている。啓蟄の日の様子が良く書かれている。

咲き映えて空へ溶けこむ初桜 篠崎 紀子

毎日観察していた桜の木に、数輪の花が開いた。吾家の開花宣言である。朝空はこよなく晴れわたり、色づきの淡い桜花が青空に同化してしまったようだ。しかし、幼い桜はしっかりと自己主張している。上五の「咲き映えて」がその様子を表している。

初音 聞く古刹の長き男坂 池田 珪子

作者にとつて実体験の俳句だと思う。寺の名称は判らぬが、やや急勾配の坂を登り切ったところに山門があるのかと想像する。早春の某日、坂の途中の竹林か灌木の中から、また鳴き声の整わぬ鶯の音が聞こえてきた。男坂を登る苦勞が遠のいてゆくような至上の時であった。

ポッキーをワイングラスに春の月 清水 桂子

はじめに断っておくが、「ポッキー」は江崎グリコ(株)の商品名であるから、本句はコマージュシャル的色彩が濃い、同様に、ヤマト運輸(株)の商品名「宅急便」が、間違つて一般名の宅配便と同義に使われていることもあるので納得した。さて、ポッキーであるが、昭和41年に発売されてから日

本国内の市場を席捲し、世界各国に販路を拡大した「棒状のチョコレート菓子」である。同社の公式サイトによれば、ポッキーのラインナップは26種類とのことで、それにつながる愛好者の多さに驚いたが、掲句の作者もその中の一人である。どんなポッキーなのか興味を湧くが、ワインとの取合せがなかなか洒落ていて見逃がせない一句である。

城望む 旅宿の朝の蜆汁 反町 修

旅行先での朝食でその旅館の誠意が伝わってくる。この蜆汁もその一つで、確り砂抜きされた蜆と熱々の汁で心が充たされる。朝日に輝く城を眺めながらの朝餉は格別なもので、旅の充実感を覚える。現在も城と昔の城下町の面影を遺している場所は幾つかあるが、絞つてゆくと其処は鳥根県の松江市で、城は天守が国宝になっている松江城(別名・千鳥城)、汁の実は、地元宍道湖産の粒揃いの蜆に行き着いた。

神童はバーの店長 四月馬鹿 新 曆文

辞書によると、神童は「才知の極めて優れた児童」と説明されているが、むかし子供心に自分には全く関係ない言葉だと思つていた。村か町にこういう特別な子が居て、長じて有名な学者とか政治家になると思つていたが、人伝に彼がバーの店長をしていると聞いてびっくりしたという俳句である。

もちろん職業に貴賤は無いが、思ってもみなかった展開に驚いている様子が窺える。季語は、それを聞いた時の驚きと人生の巡り合せの不思議さを表しているのであろう。

一 駅 の 徒 を 厭 は ず 初 桜 皆川更穂

隣駅の近くの公園の桜が咲いたとの情報に、電車に乗らずいそいそと歩いて観に行つたのである。その時の心の躍動感が、軽快で切れの良い俳句になつた。俳句の大事な要素の一つがリズムである。

春 時 雨 か つ て 洲 崎 に パ ラ ダ イ ス 森下山菜

洲崎は、東京都江東区東陽一丁目の旧地名で、元禄年間に埋め立てられた深川洲崎十萬坪の景勝地の一部であつた。明治21年に根津からこの地に遊郭が移され、吉原と共に栄えたという。昭和20年3月の東京大空襲で灰燼に帰したが、戦後間もなく「洲崎パラダイス」の名称で復興し、同33年の売春防止法成立時まで賑わつた。筆者も青春時代にこの歓楽街の名を聞いたことがあり、この句に注目した。春時雨に当時の洲崎を重ね合わせ、昭和期の猥雑な光景を甦らせた。

蓬 摘 む 妻 を 薄 目 に 肘 枕 小林京子

作者が夫になつた積りで自分の姿を詠んでいるのだが、妻を夫に置き換えてみるとなお面白い俳句になる。若草に被わ

れた野原で横になり、懸命に蓬摘みをしている妻を薄目を開けて観察している夫。一見冷酷そうに見えるが、心の中には妻への愛おしさがいっぱい詰まっている。

今 更 の 光 回 線 春 炬 燵 阿部幸代

光回線が始まつた頃宣伝が盛んで、NTTや第二電電ほかプロバイダー各社が競つて顧客確保に動いていたが、今もつて続いているのであろうか。筆者もその相手先の選択に頭を悩ました一人であつたのでこの俳句に目を止めた。作者は今春炬燵の中で光回線の宣伝チラシを読んでいるのであろう。採用すれば便利そうだが今更ねと、チラシを屑籠に捨てた。

花 の 雲 に 飛 び の る 威 勢 逆 上 が り 西幅公子

「花の雲」は季語「花」の傍題になつているが、咲満ちた桜を雲に譬えたものである。満開の桜の傍にある鉄棒で、少年が逆上がりをしている。くるりと回つて手を離せば、ふわりと桜の中に埋まってしまうようだ、感心して見ている。

花 冷 や ラ ー メ ン に 浮 く 煮 干 し の 眼 吉川拓真

夜桜を観ての帰りか。春とはいえ夜は少し肌寒い。駅裏の中華店に入ってラーメンを注文。ほどなく配膳されたラーメンに箸を付けようとしたら異なものが浮いている。出しに使つた煮干しの眼であると悟つた作者の眼力に敬服した。

水琴窟

(水明集四月号鑑賞)

池田雅夫

一村の静けさ破る雪折 新井のり子

「雪折」は積もった雪の重さで竹や木の枝などが折れること。深々と降る雪の夜の村は静まり返って物音ひとつ聞こえない。卒然、パキッと何か破裂するような音がした。不気味に響く雪折の音に自然の厳しさを感じている。「雪折ぞ」の形に。

高野山緋色法衣の初読経 野村美子

三月七日、高野山では最高位の僧侶の就任式である「法印転衣式」が行なわれ、添田大僧正が緋色の御常服を纏った。緋色法衣は法印の象徴である。法印の「初読経」という有難い新年の行事に触れて、身も心も引き締められているのだ。

床の間の翁の像に淑気かな 小川洋子

「翁の像」は長寿を願って飾られているのだろう。古くから伝わる家宝かも知れない。正月の整然とした「床の間」にでんと置かれた翁像に心を新たにしている。「翁の像や淑気

満つ」とすると、印象をより強く与えることができる。

海鳴りの能登の荒磯や雪催 森美枝子

冬の日本海は荒れて壁のような鉛色の波が押し寄せる。不気味な「海鳴り」も聞こえる。その臨場感をみごとに表現している。雪国育ちには、息苦しさを思い起こさせられる。

久伊豆の孔雀の鳴くや初茜 飯田忠男

武州岩槻総鎮守である「久伊豆」神社。昭和十三年、朝香宮が岩槻にご来臨の折に、「孔雀」三羽を奉納された。以後も孔雀を飼育しているという。そうした孔雀が新年を言祝ぐかのように鳴いたのだ。脈々とつながる歴史の重みを感じる。

両の手にそつと凍蝶囲みたり 綿貫ひさの

死んでいるのかと思えばわずかに動き、生きているかと思えば凍てて死んでいる。それを「凍蝶」という。その憐れさが人の心を引きつける。偶然に見つけた凍蝶に思わず「両の手」をさしのべ囲んでいるのだ。その優しさに救われる。

淑気満ちたる朱塗りの橋を人の波 森下美智枝

「神橋」と呼ばれる橋は神社の境内にあり、朱く塗られていることが多い。日光の神橋は有名である。初詣に行列をなし神橋を渡り、参拝するのだ。上五を「淑気満つ」として、

字余りを解消したい。何度も読み返し円滑さを確かめたい。

京菓子を包む薄紙春の雪

綿引まりこ

「京菓子を包む薄紙」を淡い「春の雪」に喩えた句。京菓子の上品さ、美しさを踏まえて春の雪のはかなさを詠んでいる。春の雪の降る日の午後のひととき、小さな京菓子を前にして寛いでいる。穏やかな日常の暮らしぶりが窺える。

太平洋独り占めする野水仙

杉浦理恵

伊豆半島などの野水仙の群落は海からの風に吹かれながらも香気を漂わせる。寒さの中で咲きそろう、その気品に人々は心惹かれる。「太平洋独り占め」の措辞から、その圧巻の規模を推しはかることができる。そんな光景を見てみたい。

おまじなひ霜焼の子に母の声

鈴木藻好

昔は「霜焼」「靴」などに多くの人々が悩まされたものだ。寒さのために手が悴み、水仕事などにより皮膚の血行が悪くなって痛痒くなる。手をさすり「おまじなひ」する母の優しさに痛みが柔らぐ。同類の語は一方を省くことができる。

蔵元の御在所跡に竜の玉

飯室夏江

何の「蔵元」かを知りたいところではあるが、その跡地にかつての蔵元の栄華を物語るかのように「竜の玉」が繁茂している。「御在所跡や」として、切れの効果を生かしたい。

束の間の日射しに酔へる仏の座

飯塚智恵子

ここでいう「仏の座」は春の七草の一つで「コオニタビラコ」のことであろう。羽状に深裂する根生葉が地面にはりつく。「束の間の日射し」を存分に受け、舌状花を咲かせる。「日射しに酔へる」の措辞が新鮮であり魅了された。

人の非は言はず語らず寒の月

嶋田洋子

「寒の月」は高々と天心に昇る。寒々とした空に星を遠ざけ冷徹な白さをみせる。一方、「人の非は言はず語らず」と沈着に物ごとを見ているふるまいを寒の月と結びつけている。迎合しない生き方と寒の月との取り合わせの妙を味わった。

寒晴や思ひつきりの深呼吸

小山あつ子

寒中の冷たい空気を「思ひつきりの深呼吸」したら、五臓がひきしまることだろう。とかく寒さに負けて身を屈め、呼吸も浅くなりがちである。そんなときだからこそ深呼吸をしているのだ。寒さに負けない強い決意が感じられる。

探梅や名もなき山に今日の当

吉田十三子

「当(て)」は、見込み、目当てなどの意味で、期待が感じられる。「名もなき山に」梅の花を見に行つたのだ。天気も上々で絶好の梅日和。満開の梅であつたにちがいない。

網野月を選

山紫集

馬繫ぐ石ある医院桃の花

カーナビは石和を告げて桃の花

摘花して桃の花木の軽びけり

一村は別世界なり桃の花

後藤綾子

青木鶴城

秋谷風舎

高島寛治

以上特選

桃の花妻の骨とる箸長し

鳥羽和風

旧道の曲がりくねつて桃の花

榊原聰子

鍵掛ける習ひなき里桃の花

町野広子

なぞり読む古き石碑や桃の花

佐々木史女

桃の花堆朱に挿せば紅の濃く

菅原真理

三姉妹桃の花園べちやくちやと

佐藤克之

「古今伝授」を冠する太刀や桃の花

丸山マシミ

里山や戦を知らぬ桃の花

篠崎紀子

人形に涙のあとや桃の花

笹本啓子

甲斐路往くりニア停めたる桃の花

渋谷さいち

桃園の頭上昼月透けてをり

池田雅夫

歩を止めて覗く生垣桃の花

下川光子

緋桃咲きあつる剃刀無精ひげ	菅原卓郎	桃の花少女は娘に変わりつつ	飛永 鼓
桃の花活けし母の手嫁がぬ子	杉浦理恵	皺深き母の手に置く桃の花	外村紀子
廢れ屋に際立つ景色桃の花	鈴木藻好	女の子生れし記念の桃の花	仲田利子
桃の花毛氈横に落ち着きぬ	鈴木玲子	桃の花旧知の友を尋ねたし	南條さわゑ
一木に源平競ふ桃の花	諏訪サヨ子	上京の旅へのエール桃の花	西幅公子
池の面を緋色に染めて桃の花	関谷多美子	いつの世も女性の強し桃の花	野口和子
甲斐の里花見と云ふは桃の花	瀬戸雄二郎	保育所の窓の明かりや桃の花	野田静香
頬紅を少し濃い目に桃の花	染谷風子	桃の花子の成長と共に咲く	野平美紗子
桃源の標なるらむ桃の花	反町 修	薄茶点て京の干菓子や桃の花	野村美子
引つ越しは同じ川沿ひ桃の花	高橋満耶子	喫茶去の卓に一枝桃の花	原田秀子
桃色の百日の稚と桃の花	武田重子	桃の花ひとつ蕾が落ちにけり	樋口元美
トンネルを抜けて信玄桃の花	田中章嘉	桃咲くや五才の稚の才女めく	日高道を

呑めば出る里のなまりぞ桃の花	檜鼻ことは	好きな一句ふと口ずさむ桃の花	元田亮一
桃の花ほめれば幼女すくすくと	福田千春	乳足りし嬰の口元桃の花	本橋稀香
天地の空間染むる桃の花	藤澤喜久	娘等の顔相似たる桃の花	森 和子
御転婆がもう二十歳かな桃の花	保坂翔太	甲斐駒の雲の中なる桃の花	森川義子
銀輪でめぐる盆地の桃日和	曲淵徹雄	埋めつくす黄の上映える桃の花	森下美智枝
とどまりしままの青春ももの花	正木萬蝶	桃園に契る三傑国興し	森美枝子
この家に父母居らまほし桃の花	松井由紀子	桃の花「ももぐみ」さんは三才児	森本早苗
桃の花当家の鬼門和ませて	松宮保人	想ひ出の彼方の人よ桃の花	山下ユリ子
桃の花嬰兒の手を見せあつて	松本光子	峠から点描の谷桃の花	山中いちい
ふるさとの駅に微笑む桃の花	丸屋詠子	駆け回る園児等に舞ふ桃の花	湯浅 和
遠方より「待つて居たよ」と桃の花	宮崎チアキ	朱唇仏おはす御寺や桃の花	横山君夫
緋桃咲き花手水へと加へけり	村杉清吉	桃の花挿す黒髪 of 艶めけり	横山札子

肩たたく双子は五歳桃の花	新 曆文	杜子春に学ぶ幸せ桃の花	梅澤佐江
花桃に十三参りの夢をのせ	阿部幸代	桃咲きて漉き音ひびく和紙の里	大塚茂子
それぞれにいろいろありて桃の花	新井孝磨	黙のままただ抱きしめて桃の花	大場順子
人形は熟寝のままや桃の花	荒井俱子	桃の花活けて心の若返る	岡田宣子
福島の干支一回り桃の花	飯田忠男	桃開く赤子の笑つてゐるやうな	奥山粉雪
紙を漉くTシャツの嫗桃の花	池田珪子	あえかなる雨に烟るや桃の花	加藤でん治
桃咲いて君は転校していつた	石川理恵	桃咲けり少女いつしか娘へと	熊倉千重子
トリミング終へ待合室のもの花	石田慶子	廃屋においてきぼりの桃の花	河野はるみ
桃の花十歩歩きし児を胸に	井上燈女	はんなりと幸せ香る桃の花	小駒さち子
勝負あり源平桃の花赤し	上戸千津子	子は母に甘えたきもの桃の花	越田栄子
桃の花スマホ操る少女の手	内田恵子	婚約の伸びやかなる日桃の花	小林京子
桃の花緋の口紅を買うてみる	梅澤輝翠	表札の褪せたる屋敷桃の花	近藤徹平

山紫集作品評

網野月を

桃の花妻の骨とる箸長し 鳥羽和風

お葬儀の際の火葬場での景である。ここまで客観的に俳句にできるものなのであろうか。作者の俳人魂に感服する思いである。もしかしたら、上五の季語「桃の花」を見ると数年前のお葬儀の事を思い出す、ということなのであろうか。それならばある程度の客観性を有することに納得も行くのだが。身近な親族と共に箸をとる思い、箸の長さに取り扱いの悪さを思い出す。そうした事事が上五の季語「桃の花」に拠ってオブラートに包まれた感がある。季語の働きの圧倒的な力が掲句にはある。

鍵掛ける習ひなき里桃の花 町野広子

中七の「習ひ」は生活、暮らしむきといった意味であらう。そこには古き良き日本の山里に住む人々の心映えが感じ取れる。座五の季語「桃の花」はつまり句意と季語の本意、本情の

取り合わせとして、同じ意味合いを重ねていることになるだろう。「桃の花」の色合いの優しさや匂いの豊饒さが句意を担保している。

桃の花堆朱に挿せば紅の濃く 菅原真理

堆朱作りの花瓶に活けたというように解した。座五は「紅の濃く」として「紅の濃し」と終止形にしていないのであるから「…というように見えた」が省略されているということである。決して事実として濃くなったわけではないのであって、作者の目からみると、作者の感じるところでは、という意味なのである。堆朱の赤色に比して桃の花が一層の紅色を濃くするのであるから、やはりそこは生物である桃の花ならではの。どの様な堆朱の花器か見てみたいものである。

「古今伝授」を冠する太刀や桃の花 丸山マスキ

その太刀は二尺六寸四分の反りの豊かな太刀である。「古今伝授」の際に細川幽斎から鳥丸光広へ贈られたものと伝えられている。人間の作り出したものが大自然の創造物に及ばないことは当たり前のことなのであるが、古今伝授の太刀と桃の花も然りである。ただ花の命は甚だ短いものである。太刀と比すれば尚更である。

人形に涙のあとや桃の花 笹本啓子

この涙はもちろん人の涙のあとである。それでも人形が自

ら泣き明かした後のように作者には見えたのである。人形への感情移入でもあろう。雛人形を自らの鑑として観ている深層心理的な視覚なのかも知れない。

桃園の頭上 昼月透けてをり 池田雅夫

冬季から春のはじめにかけては昼の月に遭遇することが多いようである。しかも頭上というからには二十三夜ころの月でもあろうか。「透けてをり」は何か透けて昼月を見せてくれているとも解せるし、昼月自体が透けているようだと解せる。掲句の場合は薄く見えた、というくらいの意味であろう。桃園の桃を仰ぎ見ていたら花枝越しに昼月が見つかったということ、サプライズなプレゼントに嬉しさを覚えていた作者が想像される。

馬繫ぐ石ある 医院 桃の花 後藤綾子

馬繫ぐ石は令和の世には不向きなもので、多分、明治かそれ以前の代物なのであろう。たまたま旧跡が敷地内に在ったとも解せるが、この場合は由緒正しき医者の家系を引き継ぐ医院と想った方が句の奥行きが増して楽しい連想も湧いてくる。「駒つなぎの桃」と名された古木が日本全国に散見されるので馬と桃花の縁には深いものがあるのかも知れない。

カーナビは石和を告げて桃の花 青木鶴城

桃の花の最盛期に山梨県笛吹市界隈の山の斜面は文字通り

桃色に染まっている。そして桃花の香りに満ちている。実りの季節の濃厚な香とは異なるが花の香はまた清新なものである。扇状地というのであろうか、起伏の緩やかな勾配が桃色に染め上げられている景は車窓からも望めて圧巻である。中七の「告げて」は向かっているとも解釈できるであろうが、今まさに通過中であると解した方が良いでしょう。カーナビに頼らずとも桃の花の咲きぶりで充分にナビゲーションされている。

摘花して桃の花木の軽びけり 秋谷風舎

果樹農家や花農家では「摘花」は重要な仕事であり、手作業による重労働にもなっていると聞く。ことに日本の果樹農家ではこれこそが最良の果樹を収穫するための最重要な手間なのである。ただ第三者の目から見ると、「摘花」は、座五の「軽びけり」と見受けられるのであろう。枝先に密集して咲いた花の群れを梳いて整理するのであるから、少々寂しい感じも残るのである。一方で枝先のすつきり感とも解せるので、これから実りを大きくする樹果への期待感にも繋がっている。

一村は別世界なり 桃の花 高島寛治

桃の花に限らず、桜でも藤でも、はたまた秋のコスモスでも村中に同種の花が咲き競う時には将に「別世界」になってしまうものである。何と見事なことであろうか。そして人人はつかの間のその「別世界」を待ち望んでもいるのである。

大村節代 選

鼓
笛
集

すれ違ふ母校の制服桜咲く
旅立ちはこのな日が良し花吹雪
かつて吾もおさげの少女花は葉に

越田栄子

不死鳥のごと桜枝垂るる玉蔵院
語ろうてそして見上ぐる桜かな
桜散り女子高の窓歌ひをり

菅原真理

金婚や老舗炭屋のしらす飯
たんぼの絮に八十路のおちよぼ口
富士を背に姉さん被り茶摘み唄

新 曆文

花びらを掃き寄せしはし春惜しむ
桜散り静かな山となりにけり
空深く点となりゆく揚雲雀

横山君夫

春の風大谷選手に教へられ
惜別の一斉メール春の夕
演説の立看残る春時雨

元田亮一

学童を見守るつつじ咲き揃ふ
この年もいつもの駅に初燕
たんぼの黄に寄り添はれ道祖神

丸屋詠子

奥四万湖青き水面に春の風
花筏ボート集る壕の中
板壁の広島城や春爛漫

仲田利子

若楓日曜朝の牧師館
修司の忌モカコーヒーの甘きかな
君知らぬ恋ふるまなざし岩躑躅

小林京子

佇めば街名画めく花の雨
咲満ちてひとひら花の涙かな
吾の手を避けて散りゆく桜かな

本橋稀香

鼓笛集作品評

大村節代

すれ違ふ母校の制服桜咲く

越田栄子

桜の花の咲く、散る頃は、入学卒業の季節である。今回の鼓笛集にも、そうした句が何句もあり、それぞれの思いに胸を打たれた。

母校の制服により、同窓の後輩なのであろう。かつての日の自分と重ねて、二句目の旅立ちにより、後輩達に幸あれと祈る作者の気持が伝わる。

不死鳥のごと桜枝垂るる玉蔵院

菅原真理

中山道から参道の続く、真言宗豊山派玉蔵院の枝垂桜は、樹齢百年余を誇る。垂れた枝に生気がなくなり、そろそろと市民が心配した。しかし杞憂にすぎなかった。今年も掲句のように復活し、市民をほっとさせた。一本の枝垂桜に一喜一憂する多勢の人々、平和ですね。

鼓笛集巻頭（五月号）

私の好きな一句（自句自解）

西幅公子

山里の瓦葺きの家は、子供の頃から好きでした。ど

つしりと、落着きがあり逞しい。

庭園とも良く合い、山里や田中に建つ姿は美しく、特に柿若葉との色合いが抜群です。こんな日本の景色をずっと見てみたいです。

たんぼの絮に八十路のおちよぼ口

新 暦文

たんぼの花は、小さな花が集まった頭花、それが絮になり風に乗って飛ぶ。茎をちぎってふっと吹いた経験は、誰にもあろう。吹いたのが「八十路のおちよぼ口」とは、ご自分の事か、いや他の人か、景が見えて何とも楽しい。

『俳句界』

四月号

私にとつての俳句革新者

長谷川かな女

—— 俳句に生きて死んでゆく覚悟

坂本宮尾（「パピルス」主宰）

俳句の革新者といえばまず思い浮かぶのは正岡子規である。ここで私は明治以降の女性俳句に限定して、その歴史をたどり、静かで地味な存在ではあるが、先駆者として大きな役割を果たした長谷川かな女（一八八七～一九六九）を取りあげようと思う。

歴史的に俳句界の主流を占めていたのは男性で、子規が俳句革新に乗り出してから、俳句を詠む女性はごくわずかであった。長谷川零餘子^{れいよし}を婿養子として迎えたかな女が、俳句の手ほどきを受けたのは、明治四十二年のこと。読書好きの

彼女はすぐ上達し、翌四十三年には「ホトトギス」に初入選をする。

葉鶏頭端書一ぱいに書きにけり

現在なら絵手紙というのであろうか、葉鶏頭の写生という句材の選び方、中七の「端書一ぱいに」に天真爛漫な大らかさが見られる。俳人として大きく伸びてゆく豊かな資質が窺われる。

女性が積極的に俳句界に参入するようになったのは、大正時代からである。かな女は気配りもでき、事務処理の能力にも優れていた。女性俳人の草分けとして、婦人十句集という通信句会や句会の幹事を務めた。まだ封建的な家父長制の濃く残っていた時代にあつて、家を守ってひっそりと暮らしていた女性たちに、俳句に親しむ機会を作る助けをした。

羽子板の重きが嬉し突かで立つ
時鳥女はもの、文秘めて

かな女の初期の代表作であるが、高濱虚子は「進むべき俳句の道」（大正7）で、かな女を取りあげ、最も熱心で、最も見るべき句が多い、と高く評価している。

やがて夫の零餘子は「ホトトギス」を離脱して、俳誌「枯野」を創刊。ところが彼は志半ばで若くして亡くなり、自宅が火事で焼失する不運が重なった。このような困難な状況にもめげずに、かな女は昭和四年に処女句集『龍膽』を上梓する。これは明治以降の初の女性の手による本格的な句集である。

冷飯に鳴らして寒し銀の箸

龍膽の太根切りたり山刀

句集の序でかな女は俳人として生きる悲壮な決意を記している。

自然を知ることを生涯のつとめとこゝろがけた零餘子のあとを辿って私も俳句のなかに生きて死んでまゐります。（『龍膽』自序）

翌五年に、かな女は「水明」を創刊して主宰となった。以後専業俳人として、女性俳句の隆盛に大きな貢献をした。

蝶のやうに畳に居れば夕顔咲く 西鶴の女みな死ぬ夜の秋

かな女は日常生活のささやかな場面、日本各地の風物を、女性の視点から捉えた穏やかで平明な作品を得意とした。同時に、大胆な発想の句も詠んでいる。また味わいのある随筆の名手でもあった。

むさし野の鳥来る松の芯無限

日本橋出身のかな女は、人当たりがよく、控え目ななかに、芯の通った強さを秘めていた。江戸っ子の画家鏑木清方、また林芙美子、岡本かの子、宇野千代、吉屋信子などの作家と交流し、俳句作家として社会に確固たる地位を築きあげた。

「女虚子」と称されたように、かな女は安定感のある作句活動を八十二歳まで展開した。女性俳人が活躍する道が開かれたのは、かな女の俳句に生きる強い気構えと尽力の賜物である。

『俳句』

四月号

論考

俳句の魅力 散文との違い

時空間の収斂と拡散、もしくは消滅

網野月を

「水明」昭和35年生

俳句（＝韻文）と散文、つまり小説などの文章との間には、基本的に相違はありません。日本語を使用して、文法も特別なものはありません。俳句には、短詩形でのリズムの工夫や表現上の少々の技法があるだけです。それらの工夫や技法は日常の日本語の延長線上にあるものです。言葉、もしくは言語としての相違と言うよりも、むしろ俳句と散文の違いは、書き手（詠み手）の伝えようとする内容の質と伝え方にあると言つて良いでしょう。

散文の最たるものは小説をはじめとする物語、と論文や鑑賞文、また実用的には取扱説明書などの説明文が考えられるでしょう。物語はストーリーを、論文は真理を、鑑賞文は価値等を伝えるもので、説明文は事柄の關係性を明らかにする

ものです。ここにはすべて言葉の論理性が必要となります。極めて合理的な言葉の使用と、使用する言葉の論理的な關係性が必要です。書き手の伝えようとする事柄と読み手の理解の間に行き違いがあつてはいけません。法律文などはその解釈をめぐつて裁判するほどのものです。取扱説明書の文に至つては、誰が読んでも同じように理解されるものでなくてはなりません。ですから散文は例えばコンピューター言語の様なものであつて、表現の内容（＝指示）に対しての読み手の同一の解釈（＝応答）を期待することが出来るのです。

それに対して俳句（＝韻文）は、心の在り様を表現するものでしょう。少々難しい言葉ですが、「心性」を表現しようとするものです。実は韻文も多種類存在しますが、俳句の場

合は特にその性格、短詩形であることなどから、詠み手の表現した内容が百パーセント読み手に伝えられることを期待できないのです。期待するものではないのです。十七音の言葉同士の関係性に合理性だけを求めないのはその点に理由があります。ですから「説明的な俳句にならないように」「報告句にならないように」と指導される先生が多いのです。

古池や蛙飛びこむ水のおと

この有名句は、読み手に拗っているいろいろと鑑賞されます。勿論、句が叙述している景は、読み手に拗って一様に解釈される場所でもありません。「古池へ蛙が飛び込んだ、その水音が聞こえた」という解釈です。ですが、鑑賞は千差万別です。表現のポイントは何処にあるのか、作者は何処から見ているのか、いや見ないで聞いているだけなのか、蛙は何匹いたのか、終いにはこの句は果たして良い句なのか悪い句なのかについてまでも議論されています。百出する鑑賞が存在しているという事実は俳句（＝韻文）の性格を端的に物語っています。実は表現する「内容の時空間」に詠み手の意図する伸縮が俳句の技法の一つとして許されているからなのです。結果として全ての読み手に俳句は同じ表現（＝指示）をしても同じ鑑賞（＝応答）を期待できないのです。しなくて良いものなのです。

その事から、鑑賞者の自由が生まれます。鑑賞者の自由は、詠み手の期待外の場合と詠み手の期待以上の場合があります。期待以上の場合には、「作品が良くなりました」などと感謝することもあるのです。どちらの場合の鑑賞もその句においては幸運だったと筆者は考えます。少なくとも読み手は真剣にその句に取り組んだのですから。

換言すれば、散文は間違いなく相手に伝えるための手法（＝機能を有する）なのです。推理小説の場合、小説家の謎解きが読み手に伝わらなければ価値が無いことになります。反して、俳句は散文とは異なる機能を有しています。俳句は、基本的に作者の心を伝えるものですが、鑑賞は読み手に任されている場合が多いということです。

その他にも俳句（＝韻文）と散文の質と伝え方の違いはあります。散文は真理を表現する（伝える）ためのものであり、韻文は美意識やある種の価値観（人生観や世界観）を表現する（伝える）ためのものです。

俳句について言語学上の理論物理学的な定義が許されるならば、俳句の技術的側面には、表現する内容の「時空間の収斂と拡散を意図するもの」という本質があるように筆者には考えられるのですが、この点については別途紙面を要するかと思います。

水明例会

第一例会（浦和）

境延昭
茂木和子

はばかり朝寝する身の女王たり
朝寝して覚めぎはに聞く水の音
花疲れ雑味の残る発泡酒
蝌蚪の紐雑巾掛けと言ふ修業
雑居ビルに幽霊会社おぼろ月
朝寝して非常ベル鳴る腹時計
得意中の得意の朝寝今少し

順子
亮一
延昭
節代
はるみ
和葉

——以上特選

雑念を払ふ警策花曇
雨戸より光一筋朝寝かな
朝寝して聞かれぬやうにラブソング
雑言にある真実や春の闇
朝寝してアドレナリンは夢の中
水温む雑魚の群透く漁港かな
朝寝して力湧きたる八十路かな

マスマシ
治子
節代
理恵
延昭
稀香
チアキ

第二例会（東京）

山中みどり
青木鶴城

隣人もその又隣も朝寝かな
WBC夫婦観戦後の朝寝
朝寝して夢の続きを今一度
廃刊の雑誌惜しみて弥生尽
朝寝する添ひ寝の方に足絡め
雑詠の推敲至難夕桜
春の川棒持つ子らに雑魚はしる
知らぬ間に着信点る朝寝かな
本屋にならぶ雑誌カラフル春の昼
朝寝せり犬も主に従ひて

拓真
徹平
はるみ
由紀子
京子
喜恵
和葉
亮一
順子
和子

葉も草も馬も眼を伏せ春時雨
土手近き町に雲雀の声届く
塗下駄に白の爪革春時雨
春時雨幌深くして人力車

いちい
竺仙
みどり

——以上特選

第三例会（東京）

五明
曲淵徹雄

傘を打つ春の時雨や音弾む
悲喜劇か劇軽な甥蜂ささる
春時雨墨堤の木々光りをり
思ひ出を押し流すかに春驟雨
御座所跡われも座りてうらかけし
屋上の蜜蜂今日も恙無く
8の字に蜂の哲学鉢に蜂

峰雄
リコ
敏江
いちい
竺仙
みどり
鶴城

「ねぼすけ」とこそばゆき声春眠し
花万朶現の闇を糶すごと
春眠や少女にかへる妻の顔
花散るや波郷の詠みし出羽の国
唇は夢か現か春眠し
囀の館となりぬ過疎の村
春眠や一駅だけの夢を見る
借老の朝餉健やか焼目刺

徹雄
順子
萬蝶
雅夫
昇
理恵



関西例会（大阪）

森本早苗報

遠方より一期一会の花回廊
葉袋の一二三四囀り

千津子
ゆら女

憂きことも暫し忘れて花吹雪
浦島草竿の長さのいろいろに

洋子
千世子

てまり歌流るる城の花筵
伐られたる古木の匂ふ春の闇

和子
さわゑ

朝桜いま飛び立たむ白鷺城

早苗

ポスターのピカソの顔や春愁ひ
摘草の「レイ」に女の子等ハワイアン

以上特選
玲子
千津子

春眠やざらりと頬に猫の舌
世を離れ野原の蝶と遊ぶ人

ゆら女
智恵子

春眠に目覚しアラーム容赦なし
うつとりと春眠のまま逝くもよし

洋子
和子

レコード盤は昭和のにはひ春の夜
一斉に回る地蔵の風車

道子
満耶子

春眠し電車の音の遠くなる
花吹雪花嫁姿想像す

千世子
さわゑ

春眠を貪る猫の寝言かな

早苗

☆

☆

昔話あれこれ 27

清寧天皇

雄略天皇には次のような逸話もある。
天皇が枝葉の繁った櫟の木の下で、祝宴を開いた時のこと。ある采女が天皇に盃を捧げようとした時、櫟の葉が一枚盃の上に落ちた。それを知らずに盃を捧げた采女を天皇はその場で切り殺そうとした。

二王子の発見

雄略天皇の皇子で第二十二代の天皇となつたが、この方には御子がなく、後継ぎがいなかった。後継ぎが決まるまで、市辺の忍爾別の王(雄略天皇に殺害された)の妹、飯豊王を王とした。

以前、雄略天皇に市辺の忍爾別の王が殺された時、忍爾別の二人の王子は直ぐに逃げ去り、身を隠して播磨の国志自牟という者の家で、馬飼いの牛飼いとして働いていた。

しかし、采女は盃に浮かぶ葉を、「その昔伊那那岐・伊那那美の二神が天の沼矛で潮水を『こおろこおろ』とかき回して初めて国生みをされた淤能基呂島のように浮かんでおります。」とその葉の尊さと美しさを称える歌を詠んで許された。天皇の青春時代は血塗られたものであったが、晩年は恋多き長閑な生活を送っている。

雄略天皇の宝算は百二十四歳である。

ある時、山部連小楯(おだて)という者が播磨の国の長官に任命されて赴任した時、志自牟の家で酒宴を催した。酒宴が酣になった時、火焚きの仕事をしていた二王子も舞うことになった。兄に次いで弟が舞った時、弟は舞の歌の中にそれとなく自分たちの素性を込めて歌った。

(つづく 丸山マスキ)

和歌山水明句会 (和歌山)

水浴びの中の一頭孕み鹿

再任は山の分校選核

花明り仔牛のやうな黒バイク

春真昼黄砂飛来の対処法

電動車をゼロから訓練竹の秋

鯉跳ねて川面に桜散りにけり

花冷えや地蔵の頭巾新しく

はしやぎだす蛭子の幟浦島草

コクーンシテイカルチャー俳句教室(さいたま新都心)

大振り好けれ里のをみなの蓬餅

朝東風やインコは人語り返す

キューポラのありし町並目刺の香

海からの涅槃西風友の声

木瓜の花破れ籬に人の声

若 鮎 句 会 (浦和)

携帯に残量表示涅槃西風

子を叩きじつと掌を見る涅槃西風

学舎にばつんと巢あり巢立鳥

涅槃西風ラストステージの静謐

朝戸風巢立ちの鳥を囀し立て

はればれと羽音残せし巢立鳥

楡林窟に楡の木高く涅槃西風

和子

道子

千枝子

千世子

満耶子

さわゑ

洋子

廻代

延昭

俱子

美枝子

俊晴

昇

稀香

秀子

さなきえ

芳春

香音子

紀子

順子

勝利への執着は良し涅槃西風
次男三男の長男巢立鳥

天地の無事の祈りや涅槃西風

妻のこゑたまに聞こえぬ涅槃西風

ミモザの会 (横浜)

縁側の甘い誘惑目借時

テキストの広げつばなし目借時

点となり線となる文字目借時

自転車金環びかり花吹雪

手馴れたる夫の包丁目借時

更衣母の着物の息づきし

目借時うつらうつらと横浜へ

木の股にズックの乾く目借時

象が鼻振るを見てゐる目借時

蘭 の 会 (浦和)

雑念を払ひて一句山笑ふ

岩肌を身を擦り寄する山躑躅

陽炎や句碑の台座を歪めをり

からからと進むリフトや山つつじ

物干しのズボン三本陽炎へる

花守や腕は神道無念流

入社式新たな念を描きつつ

千駄木のつつじの坂にきつねみて

どこ見てもファンタジックな躑躅山

拓真

月を

鶴城

喜夫

慶子

重弥子

玲子

栄子

萬蝶

由美子

詠子

史代

千春

まりこ

さよ子

珪子

風舎

小麦

小節

風子

節子

比早子

悦子

念ずれば空も心も花衣
陽炎や整形手術ビフォーアフター

警策の怖き一念木瓜の花

念仏を唱ふ托鉢濃山吹

野ばらの会 (浦和)

長閑けしやお向ひの猫大欠伸

露天湯はしばし貸し切海のどか

のどけしや「永字八法」また開く

長閑なり指で合はせる古時計

庭に来る鳥のつぶやき長閑なり

水明湾つくし句会 (大阪)

ゆれ惑ふ心定まり紫木蓮

着流しの力士に会釈花の午後

フロリダへ日本の春をメール便

工事幕取れて蛙の目借り時

きざきサークル (浦和)

信濃路に「科」の地多し鳥雲に

ミモザ咲き眼鏡ふくのもしばし止め

長考や名人戦に花ミモザ

花ミモザ引越して来た大家族

城跡に残る石垣鳥雲に

花ミモザ風は天才振付け師

花ミモザ朗らほがらと風に乗る

夕峰

月を

鶴城

京子

秀子

夏江

茂子

栄子

みき子

智恵子

人美

洋子

ゆら女

昇

光枝

和枝

啓子

和枝

啓子

和子

和子

山茶花 (浦和)

祖師堂の一壺に適ふ白木蓮
春の宵セリコで細道めぐり行き
白木蓮公園墓地の薄明り

マスマミ
美江子
綾子

蝌蚪の会 (浦和)

春の夜昔話や子と共に
菜園の割り振りせはし穀雨かな
草木の伸びる音する穀雨かな
初写経心鎮むる花馬酔木
マントルのうねりに委ね咲く馬酔木
樹々達の色青々と穀雨かな

しるく
風舎
朝香
さち子
ひさの
元美

鶴川山百合句会 (町田)

一斉に浅刈汐吹く一揆らしい
勝烈庵のとんかつ恋へば蜆汁
焼蛤の匂ひ江の島日和かな
ミモザ満開笑ひ転げて女学生
地域猫も町の一員深川めし
ピアンコもロツソも好きで浅刈舟
日曜の朝のぜいたく浅刈汁

雄二郎
月を
史代
広子
千春
萬蝶
理恵

水明鬼石句会 (鬼石)

天井絵煤けし古利花万朶
竹の子の小さき命頭出し
花の風太々神楽とともに舞ふ
春の虹明日へ生き抜く杖を買ふ

宣子
鶴城
月を
礼子

野菊の会 (与野)

野生馬の岬にまでも花菜風
外されし馬銜の馬の瞳青き踏む
跑足の馬通り過ぐ芽木の風
近づけば近寄る馬や昼の雲

野菊の会 (与野)

ほんとかな栄螺が泳ぐホントかな?
潮風や屋台の酒と焼栄螺

若狭水明会 (若狭)

海胆丼を無言で食ふた利尻浜
京へ向く花折断層のこぶし群れ
昆布食ふ雲丹はブラボー礼文島
里の酒飲み尽くしたり海胆の宿
手枕でテレビ観る夫涅槃像
ぬかづけば善人となり涅槃寺
涅槃会の僧の熱弁続きけり
涅槃会や日を経て思ふ父や母
涅槃図の裏に寄進の墨淡し
詠讃歌堂を満たしむ涅槃寺

美千子
玲子
鼓
寛久
八重子
ことは
登美江
郁子
白鷺
初花

水明鬼石句会 (鬼石)

かげろひの旅人宇宙人となる
陽炎や砲台跡に校舎立つ
竜神の息吹く新田かぎろへる
囀りや音符の如く飛び交ひぬ
陽炎や真昼の都電走み来る
陽炎の中に捨て行く前頭葉
ルソンに残る父の思ひや陽炎へり
囀を褒美に励む庭仕事
囀りや舞台は村の能楽堂
弁が立つ四月赴任の上司かな
棟上げの通し柱や春の山
お銚子はかなり上げ底焼き栄螺
陽炎うて猫抱く女美しく

和風
保人
初花

野菊の会 (与野)

和子
ナヲ子
聡子
紀子

野菊の会 (与野)

美代子
和子
清子
光子

野菊の会 (与野)

蒲公英のわた飛ぶ朝渡航の子
長閑なりヤクルト売りの世間話
柴又を觀て春の矢切の渡しかな
のどかさや足裏くすぐる浜の砂
切株は山のテール長閑なり
長閑なり城にのほりて古を
長閑さや抹茶いたたく尼の寺
祝い膳分け合ふやうに蝶来る
りんどう俳句会 (浦和)

美千子
玲子
鼓
寛久
八重子
ことは
登美江
郁子
白鷺
初花

青葉の会 (浦和)

美千子
玲子
鼓
寛久
八重子
ことは
登美江
郁子
白鷺
初花

野菊の会 (与野)

美代子
和子
清子
光子

りそな俳句会 (浦和)

夕空に馬の仔映ゆる都井岬
遠足や戦無き世の眠り猫
遠足児でつかい大仏取り困む
遠足やはしやく児童に横断旗
馬の仔に添ふ母馬の濃やかに
孕馬の厩舎に通す牧の風
遠足の最後尾ゆく老教師

阜月の会 (浦和)

蕪村集ふはりと繰りぬ春の風
大寺の焚香揺する春の風
桃園に座して微睡む小さき旅
春風や影の生まるる濠の水
保育園子等が手に手に母子草
春風や希望と悔ひを乗せ来たる
保健師の訪問介護花の冷え
空き家有り足を止めたる桃の花
嬰兒の掴むひと枝桃の花
寺の町何処の墓も桃の花
破顔一笑野仏に春の風

櫻蔭句会 (浦和)

幼子の歩む先へと蝶舞ひ来
啓蟄の吉野古道の和らぎし

白無垢を守る朱色の春日傘
闊歩して急ぎゆく女春日傘

道 文
層 文
寛 治
久美子
建治郎
マスマ
雅 夫
芙蓉句会 (浦和)
釣り人の夫に寄り添ふ春日傘
七千歩黄砂を払ふ春日傘
春雷や心の内を見透かされ
傘の内色は色々春の午後
昇進の内助の功や春の風
芽吹句会 (浦和)
行く春の夜空は丸し星一つ
手捻りの皿に手作り草の餅
おぼろ豆腐そつと崩しつ春惜しむ
春夕焼け煉瓦まだある丸の内
萌黄色の早くも変はり春惜しむ
花盛り三年ぶりのクラス会
よもぎ餅この香ぞ母の贈り物
草餅のやはらかくして指のあと

多美子
美 子

美智枝
久美子

真 理
茂 子
公 子
由紀子
千 恵
行 雄
幸 代
水明熊谷句会 (熊谷)
疎覚えの祇園小唄や朧月
春炬燵会話乏しき寡婦なりし
夕風にほのかな香り朧月
朧月眠りにつかぬ人造湖
春炬燵病の友と碁を並べ
濡れ縁に猫の寝姿春炬燵
墨絵ほかしの小江戸の鐘や朧月

櫟の会 (浦和)

黄のしづく光る朝や花ミモザ
撮り鉄のカメラに写り込むミモザ
WBCの大声援やミモザ揺れ
佐保姫が笑顔で階段降りてくる
ミモザ咲く窓辺の席を予約せり
佐保姫と袴姿のVサイン
佐保姫かも名の無きメモの女文字

正 子
道 子
税 子
仁
美 子
玲 子
富 子
千重子
ひろこ
チアキ
修
久美子
道 を

定期券初めて使ふ新入生
喚声の黒板アート入学生
打ち掛けのはにかむ顔や春の燭
新しき未来へ一歩入学す
子が駆くる波打ち際や春の暮

藻 和
好 子

千重子
敦 子
朋 子
克 之
富 子
文 子
治 子

秀 子
燈 女
栄 子
微 平
正 行
卓 郎
茂 子

めだか句会 (浦和)

川渦の白さ増しつつ春惜しむ
春蟬や街道をゆく武士ふたり
野草の名覚えぬままや春惜しむ
移ろひをカウントダウン春惜しむ
棘よけて若芽摘む指春惜しむ
春惜しむスマホで撮るは花のみか
マスク顔の自惚鏡入学式
溢れ出る夢中の秀句春惜しむ
まだ着るか出すか出さぬか春惜しむ

珊瑚の会

川べりに水漬く朽ち船柳絮とぶ
城沼の柳絮止まりしさつば舟
柳絮とぶ向さふらふらと風見鶏
柳絮ふはふは風の流れに逆らはず
柳絮とび鉄路の先の里思ふ
柳絮とぶ何処かに一揆ある如し
大皿にあふるる蔬菜夏近し
風の日は風にまかせて柳絮飛ぶ
柳絮とぶ喝采を背に大道芸
夏近し柚道駆くる白脚半
祠立つ荒磯の岩の夏近し
夏近し軍手に残る土ほこり

十三子
六弦
はるみ
謙一
知子
忠男
月を
鶴城
美智
光昇
恵子
史代
広子
和子
和葉
かつ子
喜恵
マスマ
水尾
節代

雛の会 (浦和)

観世音の五色の糸へ風光る
東の間を遊ぶ風あり藤の房
月虹や春の尼君糸競べ
山藤の装ひ高き御室山
綾糸に彼の日の吾子を花は葉に

燈女
喜恵
輝翠
チアキ
佐江

誤植訂正

五月号に訂正のお申し出がありました。

九四頁

りんどう俳句会(浦和)

店名は「天手古舞」よ山笑ふ

○まりこ
×のりこ

水明通信

「浦和宿古本いち」

一見のお勧め

染谷風子

右は、昭和五十七年から浦和さくら草
通りで、毎月末開催されている青空古本
市である。市内及び近辺の五つの古書店
が運営している。専門書、実用書、児童書、
新書文庫本等を扱い、ジャンルも多岐に
亘っている。品揃えも豊富でかつ多彩で
ある。特に、岩波の新書、文庫の絶版本
は、在庫が多く、一冊百円から二百円の

手頃価格で売られている。ものによって
は神保町より割安である。私は、神保町
で見つけられなかった古書を、この古本
市で何冊かを入手している。又、小学館
の日本古典文学全集井原西鶴編全三巻を
五百円で入手した。新品同様の三冊で全
くの買得品であった。

私は羽生の生まれである。私にとって
浦和は文化の薫りのする憧れの町であっ
た。青空古本市は、その文化の伝統の一
端を今も継承しているものと思う。本好
きの方には、是非足を運んで頂くことを
お勧め致します。

夏季競詠

(令和五年)

恒例の季音・水明集全員が対象の夏季競詠です。ふるって御出句ください。したがって七月投句の水明集はお休みです。

兼題

「団扇」

「絵団扇」「絹団扇」「京団扇」「洪団扇」
「古団扇」の傍題に限る

「夾竹桃」

傍題無

「保」

(詠込み) ※夏の季語で詠む

句数 両題通じて五句

締切 七月二十五日

投句用紙

七月号巻末に添付

季音の方は季音も投句して下さい。

令和5年水明全国大会・懇親会のご案内

令和5年水明全国大会をご案内申し上げます。前年度は周年記念式典の趣旨もあり、会場をロイヤルパインズホテル浦和にて開催いたしました。本年度は「さいたま共済会館」にて開催いたします。

誌友・同人・季音同人の皆様にはご理解の上、奮ってご参加くださいますようお願い申し上げます。

■令和5年水明全国大会

日時 令和5年6月25日（日曜日）

受付時間11時30分 開会12時 閉会17時00分

会場 さいたま共済会館 6階 601号室

〒336-0064さいたま市浦和区岸町7-5-14

Tel.048-822-3330

行事 水明賞・季音賞・かな女賞・新珠賞・鼓笛賞・山紫賞の授賞、新誌友紹介者の表彰、季音同人、新同人の紹介、兼題入選句の発表と授賞、講評等。

■水明懇親会（第93周年）

日時 令和5年6月25日（日曜日）

受付開始17時00分 開会17時30分 閉会20時30分

会場 さいたま共済会館 6階 601号室／602号室

行事 受賞者のご挨拶、アトラクションなど

■参加費（水明85周年記念全国大会より減額）

令和5年全国大会・懇親会 15,000円

令和5年全国大会のみ 3,000円

懇親会のみ 12,000円

■申込締切

令和5年6月5日（月曜日）

添付の指定「申込書」を使用し、参加費を添えて発行所総務部へお申し込み下さい。

※なお、参加費を振込にて別途送金される方は、指定「申込書」の「申込金支払方法」の振込をチェックしてください。

※宿泊等については実行委員会へお問い合わせください。

◎全国大会は貴重な機会です。永年の会員の方々は勿論、新入会員の方々もお誘い合せの上、多数ご参加ください。

令和5年水明全国大会実行委員会 実行委員長

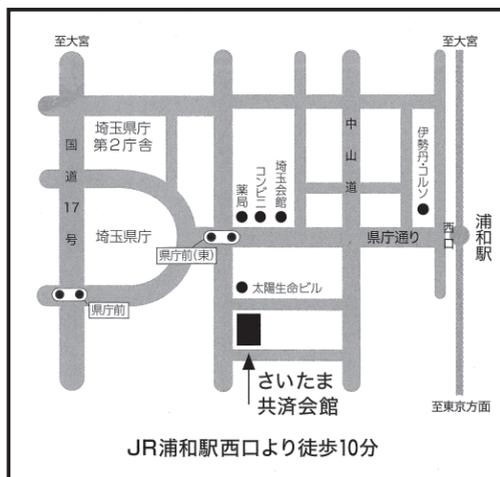
水明夏行のご案内

下記の日程にて水明恒例の夏行を開催いたします。詳細は6月号・7月号に掲出し、指定「参加申込書」は7月号に添付いたします。大勢の皆さんのご参加をお待ちしております。

- 【夏行】** 第1日目：令和5年7月29日(土)
午後1時～5時（午後12時30分受付）
第2日目：令和5年7月30日(日)
午後1時～5時（午後12時30分受付）
第3日目：令和5年7月31日(月)
午前11時30分～5時（午前11時受付）
※第3日目の開始時刻は1時間30分早くっております。

- 【会場】** JR浦和駅東口「浦和パルコ」9階および10階
浦和コミュニティーセンター
第1日目／第15会議室（9階）
第2日目・第3日目／第13集会室（10階）

- 【参加費】** 夏行：各日1,000円 事業部



全国大会会場
さいたま共済会館

風 声

○現代俳句四月号——列島春秋「地区別現代俳句歳時記」欄

安珍塚にいま乱声の花吹雪 大橋迪代

○現代俳句四月号——「現代俳句の風」欄

故郷や蛙鳴く田を一望す 岡野順子

君が代の「代」は「年令」説く二月 菊池ひろこ

鶉色の春日傘ゆくをんな坂 大塚茂子

花開く笑ひと友を知る子らよ 小駒さち子

砂浜は人恋ふところ桜貝 五明 昇

野遊びの花いちもんめ誰が欲し 本橋稀香

○現代俳句四月号——「現代俳句の風」秀句を採る」欄

○若林つる子氏の感銘十句抄に 五明 昇

砂浜は人恋ふところ桜貝 五明 昇

○くちら（中尾公彦主宰）四月号——「受贈俳誌美術館」欄

春菊買うてロマンズグレーバスを待つ 鬼之介

○新月（松田碧霞代表）四月号——「受贈俳誌紹介」欄

人間が神を演ずる里神楽 鬼之介

○雪嶺（石本石鬼主宰）四・五・六月号——「受贈誌」欄

陣羽織脱ぎたるごとく散る紅葉 鬼之介

行く年や古道具屋にある秩序 〃

○太陽（吉原文音主宰）四月号——「受贈誌御礼」欄

麦の芽に遠き約束よみがへる 鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰）四月号——「諸家近詠」欄

人間が神を演ずる里神楽 鬼之介

○白鳥（高松文月主宰）四月号——「受贈俳誌より」欄

稜線は寝釈迦のかたち山眠る 鬼之介

○筈（山本一步主宰）四月号——「受贈誌の一句」欄

大仏をくすぐるごとく煤払 反町 修

（日高道を抄出）

水明発展基金御礼（敬称略）

— 令和五年四月三十日現在 —

— 合計92口 —

小駒さち子	10口	春の吟行会より	保坂翔太	1口	
関根千恵	5口	小林京子	1口	青木鶴城	2口
新 曆文	2口	石山かつ子	2口	河野はるみ	1口
宮崎紫水	8口	丸山マズミ	1口	日高道を	2口
大村節代	10口	大塚茂子	1口	田中章嘉	2口
池田雅夫	2口	石井喜恵	1口	反町 修	2口
阿部幸代	1口	宮崎チアキ	1口	柚木治子	2口
内田恵子	10口	曲淵徹雄	2口	石田慶子	2口
山岸久美子	2口	大場順子	2口	星野和葉	1口
鈴木玲子	10口	岡田宣子	1口	越田栄子	1口
永野史代	1口	松本光子	1口	日吉亜弥子	2口

後記

今月からコロナの位置づけが、二類から五類に移行しました。皆様はマスク等、いかがですか。

六月二十五日は全国大会です。

五月号に全国大会の申込書をおつけしましたが、申込みはお済みでしょうか。

因みに全国大会の皆様は投句は一六〇二句に及び、現在主宰が鋭意選句中です。水明賞、季音賞、かな女賞、新珠賞、鼓笛賞、山紫賞の六賞と共に、大会で表彰、短冊等を頂ける事でしょう。

今年の大会は「さいたま共済会館」になります。パインズホテルより少し遠くて、大変と思います。水明五月号、六月号の地図を参考にして、お出かけ下さい。

尚、九月号にて、全国大会と祝賀会のあれこれ、さらに皆様にご投句頂いた全国大会兼題句の主宰選の句の数々を特集し、掲載する

予定です。

今年は神田祭はじめ各地の祭りやイベントも盛大に行われていきます。水明の全国大会も中止の心配が全くない日が来るとは、夢のようです。

ところで、坂の多い街では、電動自転車は、まことに、ありがたい存在です。私も水明発行所に行く時や買物の時に愛用しています。荷物の多い時には頼りになる相棒です。

五月から自転車に乗る時は「ヘルメットをかぶる」事が努力義務になりました。危ないのは分かりますが、重いし荷物になるしで大人は誰も被っていません。私も半分の人が被ったらと思います。今月号に夏季競詠の募集を載せました。七月号に投句用紙を添付しますので、ご投句下さい。

(節代)

今月のはてな？

- 木乃伊(みいら)
- 糸管(しかん)
- 鬱金草(うこんそう)
- 那掄(やゆ)
- 徒(かち)
- 軒桁(のきげた)
- 喫茶去(きつさこ)
- 太々神楽(たいたいかぐら)
- 馬銜(ばみ)
- 跑足(だくあし)

頁 22 27 30 31 32 36 51 57 68

水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、

ご用の方は 時間内にお願ひします。)

水明

令和五年六月号
通巻一一一三号
令和五年六月一日発行

発行所

水明俳句会

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一〇二二

電話 048-822-4741

ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費 (誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費 (誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇一〇一九三三九三

発行人

山本鬼之介

印刷所

中央美版

季音抄

山本鬼之介

爪を噛む癖ある少女桜貝
マヌカンのうしろを歩む春の蠅
丹の橋を渡り万朶の桜見に
今日穀雨優しくなりし木々の棘
吹雪かと紛ふ柳絮に遊びけり
みどり立つ山のふくらむ宮参り
恐竜の骨を探しにこどもの日
潔さ内に夜桜艶めかし
菜種梅雨世に置き去りの常夜燈
武蔵野の逃水追うて安房の海
花散るや波郷の詠みし出羽の国
ませ垣を越えつ潜りつ昼の蝶
囀や真ん中に街角ピアノ
正眼に構へし鍬ぞ龍天に
麦の秋農婦にもある秘密基地
おぼろ豆腐そつと崩しつ春惜しむ
夢人にほほ抓らるる四月馬鹿
清明や墨のにはほひの命名書

永野史代
西山貴美子
波多野寿子
星野和葉
茂木和子
矢作水尾
鳥羽和風
森本早苗
井上燈女
梅澤佐江
大場順子
松井由紀子
日高道を
檜鼻ことは
飛永 鼓
熊倉千重子
河野はるみ
青木鶴城

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月を付す)

▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由
数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄

山本鬼之介

風に乗る微かな香り山桜
 海鼠壁あの日のままに紅椿
 縄文の遺跡の空に雲雀鳴く
 春の海幻視消えゆく村景色
 朧夜や映画に粹な悪党が
 春眠や寝て一畳の小宇宙
 格子戸の並ぶ川筋糸柳
 啓蟄の土やはらかに夜の雨
 咲き映えて空へ溶けこむ初桜
 初音聞く古刹の長き男坂
 ポツキーをワイングラスに春の月
 城望む旅宿の朝餉蜆汁
 神童はバーの店長四月馬鹿
 一駅の徒を厭はず初桜
 春時雨かつて州崎にパラダイス
 蓬摘む妻を薄目に肘枕
 今更の光回線春炬燵
 花の雲に飛びのる威勢逆上がり

元田亮一
 梅澤輝翠
 岡田宣子
 山岸久美子
 丸屋詠子
 菅原卓郎
 菅原真理
 越田栄子
 篠崎紀子
 池田珪子
 清水桂子
 反町修
 新曆文
 皆川更穂
 森下山菜
 小林京子
 阿部幸代
 西幅公子

水明例会案内	句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 青木鶴城
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋勉代	森本早苗

水 明

令和五年六月一日発行 毎月一日発行

(第九十六卷 第六号)

定価 一〇〇〇円